

M-GTA 研究会 News Letter No.108

編集・発行:M-GTA 研究会事務局

研究会のホームページ: <https://m-gta.jp>

研究会事務局アドレス: office@m-gta.jp

世話人: 阿部正子、伊藤祐紀子、今井朋子、唐田順子、菊地真実、倉田貞美、坂本智代枝、佐川佳南枝、隅谷理子、竹下浩、丹野ひろみ、都丸けい子、長山 豊、根本愛子、林 葉子、宮崎貴久子、山崎浩司、McDonald, Darren (五十音順)

相談役: 小倉啓子、木下康仁、小嶋章吾 (五十音順)

<目次>

◇2021 年度会員限定シンポジウム.....	1
【報告】	2
畑中 大路／自著を語る—『学校組織におけるミドル・アップダウン・マネジメント—アイデアはいかにして生み出されるか』	
◇第 94 定例研究会	10
【第一報告】	11
石川 菜津美／児童指導員が発達障害児の就学移行を支援するプロセス	
【第二報告】	21
宮本 堯明／持効性注射製剤(LAI)に対する統合失調症患者の意味づけの変化に関する研究 —病気を否認しながらも持効性注射製剤の継続投与に至るプロセスを明らかにする—	
◇西日本 M-GTA 研究会 2021 年度の活動報告.....	30
◇中四国 M-GTA 研究会 2021 年度の活動報告.....	31
◇次回・総会のお知らせ.....	32
◇編集後記	32

◇2021 年度会員限定シンポジウム

【日時】2022 年 1 月 22 日(土)

【場所】オンライン(ZOOM)

【申込者】55 名(五十音順)

※Zoom で所属先の記載があった方のみ所属先を記載しています。

阿部 正子(山梨大学), 安藤 晴美(山梨大学), 飯島 彩加(愛知県立大学), 飯場 聡子, 井上 みゆき(和歌山県立医科大学), 今井 朋子(青山学院大学), 江口 賀子(西九州大学), 大谷 哲弘(立命館大学), 大橋 重子(大正大学), 恩幣 宏美, 風間 眞理(奈良県立医科大学), 柏 美智(新潟大学), 勝又

あずさ(成城大学), 唐田 順子(山口県立大学), 菊地 真実(帝京平成大学), 木下 亜紀(国際医療福祉大学), 木下 康仁(聖路加国際大学), 越雲 美奈子(獨協医科大学), 坂本 智代枝(大正大学), 櫻井 理恵(千葉県立保健医療大学), 佐藤 優香(信州大学), 清水 史恵, 正田 温子(早稲田大学), 杉山 智江(埼玉医科大学), 鈴木 聡子(千葉大学), 鈴木 泰子, 高 祐子, 高志 博明(NPO 法人 L and P), 高橋 国法(東京都市大学), 田川 佳代子(愛知県立大学), 谷口 あけみ(聖マリア学院大学), 丹野 ひろみ(桜美林大学), 千葉 洋平(岐阜薬科大学), 辻 あさみ(和歌山県立医科大学), 都丸 けい子(聖徳大学), 中込 彩香(山梨大学医学部附属病院), 長山 豊, 根本 愛子(東京大学), 根本 淳子(明治学院大学), 畑中 大路(長崎大学), 濱谷 雅子(東京都立大学), 林 葉子(JH 産業医科学研究所), 原 裕子, 原 理恵(純真学園大学), 平塚 克洋(上智大学), 夫 博美(大阪信愛学院短期大学), 帆苺 なおみ(群馬大学), 堀越 香(群馬大学), 三橋 礼子(国際医療福祉大学), 宮城島 恭子(浜松医科大学), 森澤 隆行(武蔵野大学), 山口 江利子(春日井市役所), 横井 優子(岐阜聖徳学園大学), 依田 純子(山梨県立大学), 渡部 亜矢(一社 実家片づけ整理協会), 渡辺 隆行(東京女子大学)

【報告】

畑中 大路(長崎大学)

Taiji HATANAKA:Nagasaki University

自著を語る—『学校組織におけるミドル・アップダウン・マネジメント—アイデアはいかにして生み出されるか』

Talking about my own book: Middle-Up-Down Management in School Organization: How to create the ideas for Innovative Educational Practices

<p>2022年1月22日(土) 13:30~16:30 M-GTA研究会</p> <p>自著を語る— 『学校組織におけるミドル・アップダウン・マネジメント— アイデアはいかにして生み出されるか』(M-GTAモノグラフシリーズ4)</p> <p>畑中大路(長崎大学教育学部) taijihatanaka@nagasaki-u.ac.jp</p>	<p style="text-align: right;">自己紹介(補足)</p> <p>1986(S61) 長崎市生まれ 2005(H17) 九州大学 教育学部 入学 2009(H21) 修士課程 進学 2011年3月 九州M-GTA研究会入会 2011(H23) 博士後期課程 進学 2011年4月 九州M-GTA研究会で報告 2011年10月 第58回M-GTA研究会で報告 2012年6月 第一報 学会投稿 「M-GTAを用いた学校経営分析の可能性」『日本教育経営学会紀要』54号 2014年3月 第二報 博士論文提出 「学校経営過程研究における方法論の考察」 2014(H26) 山口東京理科大学 着任 2016(H28) 長崎大学教育学部 着任 2018(H30) 出版</p>
--	--

教職

前提 1

- ・ **職務範囲の無限定性**
(例) 授業(教科指導)、生徒指導、給食指導、下校指導…
- ・ **同時進行で仕事をこなす複雑性**
(例) 給食指導 + 学級事務 + 生徒指導 + …
- ・ **状況に大きく左右される流動性**
(例) 授業中に子どもの体調が悪くなったら…

久富善之『日本の教員文化の社会学的研究』多賀出版、1994年 など

学校組織

前提 2

- ・ 行政委員会としての教育委員会

```

    graph TD
      A[都道府県教育委員会  
市町村教育委員会] -- 人事異動 --> B[公立学校]
      A -- 服務監督 など --> C[公立学校]
      A -- 服務監督 など --> D[公立学校]
    
```

学校組織

前提 2

- ・ 目標、技術、対象が不明確・不明瞭
- ・ フラットな組織形態
- ・ 校長の職務を教職員へ分散 (校務分掌)

教務主任、研究主任、学年主任、進路指導主事…

校長

カリキュラム | 教諭等 | 進路指導

授業 | 学年運営

教務主任は、校長の監督を受け、教育計画の立案その他の教務に関する事項について連絡調整及び指導、助言に当たる。

- ・ 組織的かつスピーディな意思決定が困難
- ・ 1970年代以降、学校組織の重層化

校長

副校長

教頭

主幹教諭

ミドル層への着目

指導教諭

教諭等

研究目的：二つの背景

序章

- ・ 学校経営を対象にした先行研究
→インプット・アウトプット分析が主流

インプット → アウトプット

(例) 校長のリーダーシップ (例) 学力向上

- ・ ミドル層への期待、育成の必要性が高まる
→「あるべき姿」が語られる

「ミドルリーダーが学校経営へ参画するプロセス」を解明し、その育成に資する知見を導き出す

概念整理

1章

①ミドルリーダー

- ・ 組織の「ミドル」(中間)にある教員
(例) 教務主任、学年主任、主幹教諭、指導教諭
- ・ 人生の「ミドル期」にある教員
(例) 中堅教員、30歳前後～40歳前後
- ・ 組織に影響を与える教員
(例) 「若手だが周囲に自然と人が集まる先生」…

組織のミドル (職位/役割)

人生の「ミドル期」 (年齢)

影響力

概念整理

1章

②ミドル・アップダウン・マネジメント：分析視座

- ・ 教育活動におけるアイデア
- ・ 学校組織の重層化
- ・ 暗黙知→形式知へ変換する、ミドル・アップダウン・マネジメントへの期待

理想 → 経営層

矛盾 → ミドル

現実 → 実践層

矛盾解決 アイデア実現

- ✓ 組織規模の小ささ
- ✓ ミドルの権限の曖昧さ

→濃密な相互作用

事例 1：運動会の運営

2章

～ミドル・アップダウン・マネジメントの実態を探る～

- ・ D小学校 出畑教諭(教務主任)を対象とした調査
- ・ データ収集方法：シャドーイング

D小学校：大規模校、保護者との信頼構築を重視
出畑教諭：3年目、教務主任、6-A担任代替
水田教諭：中学校籍、6学年主任
副校長：1年目
教頭：中学校籍、1年目

- ・ 児童数増加による校舎増築、運動場縮小
- ・ 運動会の運営に課題 (保護者の協議参観・休憩場所)
- ・ 出畑教諭による二つのアイデア
①一時観覧席設置、②全校舎開放

事例1：運動会の運営

～ミドル・アップダウン・マネジメントの実践を捉える～

2章

①一時観覧席設置
昨年度アンケート「競技を見るスペースが少ない」

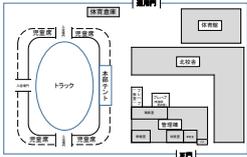


図2-4 2008年度運動会配置

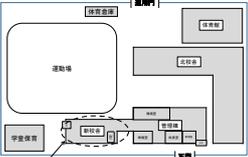


図2-2 2009年度以降のD小学校校舎配置

11

事例1：運動会の運営

～ミドル・アップダウン・マネジメントの実践を捉える～

2章

- 出畑教諭、会議で「一時観覧席設置」提案
- 実現可能性へ疑問が寄せられる
- 水田教諭：詳細な計画、副校長：杭とロープ購入

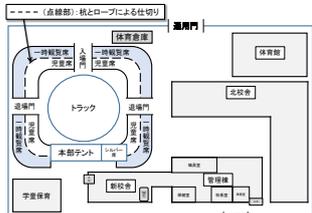


図2-6 一時観覧席配置

12

事例1：運動会の運営

～ミドル・アップダウン・マネジメントの実践を捉える～

2章

②全校舎開放
昨年度アンケート「休憩スペースが少ない」

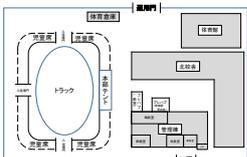


図2-4 2008年度運動会配置

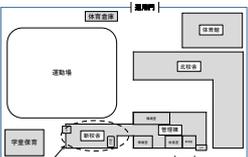


図2-2 2009年度以降のD小学校校舎配置

13

事例1：運動会の運営

～ミドル・アップダウン・マネジメントの実践を捉える～

2章

- 会議で「全校舎開放」提案
- 危機管理上、否定的な意見（水田教諭、副校長）
- 教頭の協力を得ることにより、修正計画で実現

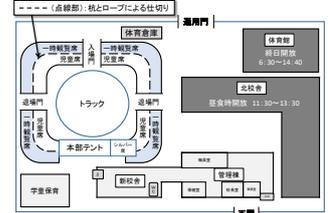


図2-8 一時観覧席配置および校舎開放

14

事例1：運動会の運営

～ミドル・アップダウン・マネジメントの実践を捉える～

2章

- 「一時観覧席設置」「全校舎開放」
- 「保護者・地域との連携」（理想）と「狭い運動場」（現実）の間に生じた矛盾（課題）を解決するアイデア
- 権限のない出畑教諭、水田教諭・副校長・教頭を巻き込むことで実現
- 学校組織におけるミドル・アップダウン・マネジメント実現要因としての「巻き込み」

15

事例2：授業研究の継続

～ミドル・アップダウン・マネジメントの実践を捉える～

3章

- 日本の学校教育の特徴：授業研究
- Y小学校で長期的に取り組まれる授業研究を調査
- データ収集方法：インタビュー

Y小学校：創立100数年、自己肯定感の育成、
研究教科：算数
木室教諭：学年主任、教職経験23年
松尾教諭：研究主任、教職経験22年
井戸教諭：教職経験11年

- 木室教諭、井戸教諭による授業アイデア

16

事例2：授業研究の継続

～ミドル・アップダウン・マネジメントの実践を捉える～

3章

木室教諭のアイデア

- 一般的な算数授業：問題提示→自力解決→発表
- 問題提示→自力解決+交流タイム→発表



- 「誰の説明がわかりやすかったか」等も発表可能
- 「できないことを共有し、失敗に共感できる学級」

→自身のクラスで実践、
松尾教諭の巻き込み、Y小学校全体での実施、
同学年の若手 井戸教諭との共通理解

17

事例2：授業研究の継続

～ミドル・アップダウン・マネジメントの実践を捉える～

3章

- 翌年、木室教諭転出（異動）
- 井戸教諭による修正（新たなアイデア）
- 問題提示→自力解決+交流タイム→発表



- 「ありのままの自分」を表現できる学級経営
→自身のクラスで実践、
校長の後押し、全校へ向け実践発表、
全校での実施

18

事例2：授業研究の継続

～ミドル・アップダウン・マネジメントの実践を捉える～

3章

- 交流タイム（赤・白・黒帽子）
- 「自己肯定感育成」（理想）と「授業の実際」（現実）の間に生じた矛盾（課題）を解決するアイデア
- 木室教諭：自身の実践を通じて、研究主任（松尾教諭）等を巻き込むことでアイデアを実現
- 井戸教諭：自身の実践を通じて、教職員を巻き込むことでアイデアを実現
- ミドル・アップダウン・マネジメント実現要因としての「巻き込み」の確認

なぜM-GTAか&手順

4章

- ミドル・アップダウンマネジメントで「巻き込み」がいかになされるかというプロセスの把握や、プロセスの説明と予測（理論生成）はできていない
- M-GTAに着目
 - ✓ 濃密な社会的相互作用
 - ✓ 暗黙知の理解が求められる（切片化が困難）
 - ✓ 応用（ミドルリーダー育成が喫緊の課題）

なぜM-GTAか&手順

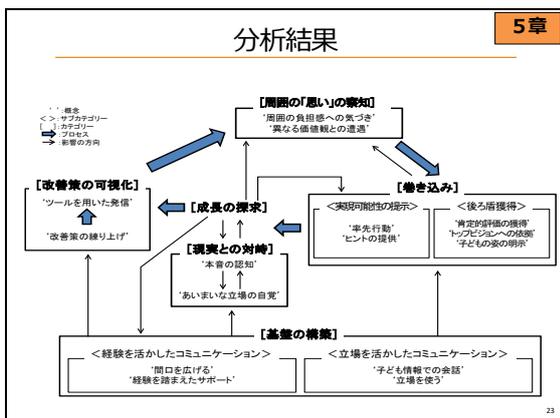
4章

- 研究テーマ：ミドルリーダーが学校経営へ参画するプロセス
- 分析テーマ：ミドル・アップダウン・マネジメントにおける「巻き込み」プロセス
- 分析焦点者：上記プロセスを遂行するミドルリーダー
- データ収集方法：インタビュー

問1：学校の課題解決を目指した取り組みとして、新たなアイデアを提案した経緯があるか

問2：そのプロセスの具体はどのようなものか

教職員名(調査当時)	教職員名	職位等	実践の概要	
1	Ko	22年	教務主任	・自校の校務分掌組織に連動させた、教員全員が主体的に行う学校評価プロジェクトの実施。
2	Lo	23年	研究主任	・特別支援教育の研究指定(1年間)へ向けた実施体制の構築と研究の実施。
3	Mn	27年	研究主任 学年主任	・校内研究活性化に向けた研究テーマ共通理解の徹底。 ・保護者懇談会参加率を高めるための、子どもばかりシステム構築。
4	Nm	22年	研究主任	・校内研究への参画意識向上をめざし行った、研究テーマ決定手続きの厳密化とそれを通じた共通理解の徹底。
5	Oi	23年	教務主任 (主幹教諭)	・保護者との信頼関係構築を目指し実施した、オープンスクールの計画及び運営。
6	Pk	22年	教務主任	・ミドルリーダーを中軸とした各学年運営・学校経営の実施。
7	Qj	32年	教務主任	・総合的な学習の時間導入期における、平和学習の推進。 ・校内研究(算数科)における課題提示及び実施方法の提案。
8	Ri	25年	研究主任	・校内研究活性化方策の一つとしての「全教員の提案公開」導入。
9	Sh	30年	特別支援教育 コーディネーター	・学校行事や授業を活用した、特別支援学級児童の学びの場・表現の場の保証。
10	Tr	30年	学年主任	・総合的な学習の時間の内容増加に伴い行った授業内容(地域行事)の削減。
11	Uf	25年	6年担任	・運動会演技において行われる、選手選択種目(紅白対抗種目)の増加。
12	Ve	15年	研究主任	・算数研究が盛んな勤務校における、教師の参画を高める校内研究の運営。



周囲の「巻き込み」が重要となるミドル・アップダウン・マネジメントを通じたアイデア実現行動は、ミドルリーダーが置かれる「ミドル」という立場ゆえ生じる【現実との対峙】が契機となり始まる。この【現実との対峙】とミドルリーダーの【成長の探求】の往還から学校改善へ向けた取り組みであるアイデアが発案され、アイデアは【改善策の可視化】によって周囲へと提示される。

ただし、ミドルリーダーによって発案されたアイデアは必ずしも周囲の賛同を得られるとは限らず、ミドルリーダーは【周囲の「思い」の察知】に至ることになる。そして、この過程で知りえた周囲の様々な「思い」へ対処するべく、ミドルリーダーは自身の「ミドル」という立ち位置を活かし、日常的な【基盤の構築】も用いながら、アイデア実現へ向けた周囲の【巻き込み】を行う。その際ミドルリーダーが抱く【成長の探求】は自身を突き動かす原動力・手段になるとともに、周囲を巻き込む目的として機能する。

この【巻き込み】によってなされるアイデア実現が、継続的・螺旋上昇的に行われることにより、学校組織におけるミドル・アップダウン・マネジメントが駆動する。

分析結果の応用

補章

- ①研究者（筆者）による応用、②実践者による応用
- ミドルリーダー育成を企図した教員研修に応用

作業①：わが校の課題

【現実との対峙】
【成長の探求】

作業②：改善策

【改善策の可視化】

作業③：改善策の提案

作業④：周囲の反応の把握

【周囲の「思い」の察知】

作業⑤：周囲を巻き込む

【巻き込み】

作業⑥：日常的な行動

【基盤の構築】

分析結果の応用

補章

- ①研究者（筆者）による応用、②実践者による応用
- ミドルリーダー育成を企図した福岡県教育センターによる調査研究
- 畑中：M-GTA結果の説明
- その後、調査枠組として採用

項目	内容	備考
1	校長の役割	校長の役割は、学校経営の方向性を示し、教職員の士気を鼓舞することである。校長は、学校のリーダーとして、教職員のリーダーシップを発揮し、学校全体の発展に貢献する。
2	教職員の役割	教職員の役割は、授業の質を高め、生徒の成長を支援することである。教職員は、互いに協力し、学校全体の発展に貢献する。
3	生徒の役割	生徒の役割は、学習に取り組むことである。生徒は、自ら学び、自ら考え、自ら行動し、自己成長を図る。
4	保護者の役割	保護者の役割は、家庭での学習環境を整え、子供の成長を支援することである。保護者は、学校と連携し、子供の成長を支援する。
5	地域との連携	地域との連携は、学校経営に資する資源を確保することである。学校は、地域と連携し、互いに発展させる。
6	国際化の推進	国際化の推進は、グローバル人材の育成に資することである。学校は、国際的な視野を養い、グローバル人材を育成する。
7	ICTの活用	ICTの活用は、授業の質を高め、学習の効率化を図ることである。学校は、ICTを活用し、学習の効率化を図る。
8	生涯学習の推進	生涯学習の推進は、社会人の成長を支援することである。学校は、社会人と連携し、生涯学習を推進する。
9	環境教育の推進	環境教育の推進は、持続可能な社会の実現に資することである。学校は、環境教育を推進し、持続可能な社会の実現に貢献する。
10	健康づくりの推進	健康づくりの推進は、生徒の健康を確保することである。学校は、健康づくりを推進し、生徒の健康を確保する。
11	安全対策の推進	安全対策の推進は、生徒の安全を確保することである。学校は、安全対策を推進し、生徒の安全を確保する。
12	危機管理の推進	危機管理の推進は、学校の危機を未然に防ぐことである。学校は、危機管理を推進し、学校の危機を未然に防ぐ。
13	情報セキュリティの確保	情報セキュリティの確保は、学校の情報を保護することである。学校は、情報セキュリティを確保し、学校の情報を保護する。
14	防災対策の推進	防災対策の推進は、災害時の対応を円滑にするためである。学校は、防災対策を推進し、災害時の対応を円滑にする。
15	交通安全の推進	交通安全の推進は、生徒の安全を確保することである。学校は、交通安全を推進し、生徒の安全を確保する。
16	防犯教育の推進	防犯教育の推進は、犯罪の予防に資することである。学校は、防犯教育を推進し、犯罪の予防に資する。
17	防災教育の推進	防災教育の推進は、災害時の対応を円滑にするためである。学校は、防災教育を推進し、災害時の対応を円滑にする。
18	交通安全教育の推進	交通安全教育の推進は、生徒の安全を確保することである。学校は、交通安全教育を推進し、生徒の安全を確保する。
19	防犯教育の推進	防犯教育の推進は、犯罪の予防に資することである。学校は、防犯教育を推進し、犯罪の予防に資する。
20	防災教育の推進	防災教育の推進は、災害時の対応を円滑にするためである。学校は、防災教育を推進し、災害時の対応を円滑にする。

表補-2 ミドルリーダーに求められる20の行動様式チェックリスト (福岡県教育センター編2016: 27)

応用：その後の展開

- ①研究者（筆者）による応用、
- ②実践者による応用
- 教職大学院等で活用（されているようです）
- ✓ スクールリーダー養成を目的とする専門職大学院
- ✓ アクションリサーチをもとにした実践研究報告書

応用：その後の展開

- ①研究者（筆者）による応用、
- ②実践者による応用
- ミドルリーダー研修での活用を継続
- (例) 長崎県「次代を担うミドルリーダー研修」
- 2年間の研修講座

1年目

ミドルリーダー論の講義(6月)

➡

2年目

実践プラン作成(2月)

実践報告、振り返り(2月)

※1年目ワークシートへ加筆

応用：その後の展開

- ①研究者（筆者）による応用、
- ②実践者による応用
- 報告者（畑中）自身も教職大学院で勤務院生（ミドルリーダー/ミドルリーダー候補者）への研究指導
- 学校改善へ取り組む長崎県内各学校へのコンサルテーション
- M-GTA分析結果を通して「現場」をみることで、課題や成果が見えてくる

今後の研究課題

終章

- 研究テーマ：ミドルリーダーが学校経営へ参画するプロセス
 - 分析テーマ：ミドル・アップダウン・マネジメントにおける「巻き込み」プロセス
- ① 異なる分析焦点者を設定しての分析
 - ② 異なる分析テーマでの分析
 - ③ 理論修正・応用…「現場」とはどこか
 - ④ ミドルリーダー育成とサポート

今後の研究課題

終章

- 「ミドルリーダーに関わる管理職」

学校を動かす！

ミドルリーダーのマネジメント

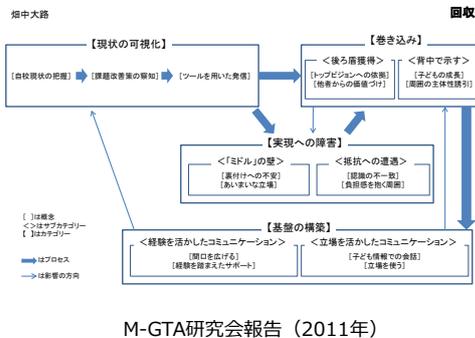
第12回

「総学」

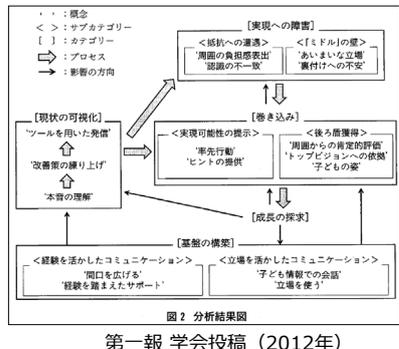
本連載では、「ミドルリーダー」は、学校を動かすのか？、そして「管理職」は、ミドルリーダーと組織へいかに働きかけを行っているのか？、四つの事例をもとに論じてきた。連載最終となる本号は、事例を振り返りながらその要点を確認したい。「ミドルリーダー」は、ミドル・アップダウン

『教職研修』第584号～595号

おわりに～同テーマを追い続けて



おわりに～同テーマを追い続けて



畑中:当時、小倉啓子先生のSVで「結局、この研究が対象とする行動は何を目的としているのか」という問いかけを繰り返し受けたことにより、何度もデータを読み返し、また、フィールドワークを継続する中で、確認・納得して位置付けた。

C氏:敢えてカテゴリーとせずに、コア概念としておいてもよかったかもしれない。

・B氏:「[成長の探求]と[現実との対峙]との行き来がスタートである」というところが腑に落ちない。‘本音の認知’で課題がみつき、[成長の探求]へとつながるのであれば分かるが、なぜ「行き来」なのか。

畑中:組織の課題(本分析で言う‘本音の認知’)を認識する教員は多いが、そこで留まってしまい、[成長の探求]といった行動を起こす教員は意外と少ない。「ミドルである自分には無理かもしれない」といった逡巡を繰り返し、そこを突き抜けていくことができたときに[成長の探求]が行動の目的と原動力になり、プロセスが動き出す。

C氏:‘本音の認知’で留まっていたところから、なぜ探求心が芽生えたのか」という、新たな研究上の問いが生まれるかもしれない。

・D氏:分析結果の応用まで考えることが、M-GTAを用いて分析することの意味・意義でもある。報告者(畑中)は、様々な現場での応用を試みているようであるが、その展開における戦略や、現場に興味関心を抱いてもらうための戦略があれば教えてほしい。

畑中:学校現場がこのテーマ(=ミドルリーダー育成)を求めており、現場のニーズと報告者の思いが合致したため、応用の展開が可能になったと考える。「戦略的な仕掛け」ではないが、今振り返れば、「現場のニーズに応えたテーマ設定を行ったこと」が戦略的だったのかもしれない。

・D氏:分析結果が研修ワークシートに落とし込まれていくまでの流れを教えてください。

畑中:与えられた研修時間に合う形でプロトタイプワークシートを作り、研修を実施し、フィードバックを受けて修正、再度実践…を繰り返すことで、現在のワークシートの形になった。

・E氏:「分析結果図を現場で応用する」だけでなく、「大学教育のカリキュラムに落とし込み、養成する」という応用の方法・可能性もあるのではないかと。

畑中:その発想はなかったが、現勤校での講義・演習等での実践を今後検討してみたい。

・F氏:M-GTAでは相互作用のプロセスを明らかにしていくように理解しているが、本研究における分析焦点者(ミドルリーダー)の相互作用の対象は何になるのか。

畑中:組織構成員。そこには、管理職も、若手・ベテラン教員等も含まれる。

・F氏:「巻き込み」という言葉はインタビューの中で語られた言葉なのか。研修の場で「巻き込み」という言葉を使って共通理解を図れるのか。御幣を招くのではないかと(例えば管理職が、「私たちは巻き込まれているのか」と気分を害する、など)。

畑中:当時の調査で多くの教員が語っていたわけではないが、「暗黙知」として学校には存在していると考え。当時分析をする際には、その「暗黙知」を解釈し、「巻き込み」という言葉に紡いでいった。また、「暗黙知」として存在しているため、今のところ、研修等で共通理解を図れなかった経験はない。むしろ最近では、多くの教員が「巻き込み」という言葉を使っているような印象がある。報告者の研究の影響というわけではないと思うが、「暗黙知」が「形式知」化されてきているのかもしれない。管理職においても「ミドルリーダーをサポートするために、自分は敢えて巻き込まれている」とポジティブに語る校長・教頭も増えつつある。

・G氏:10年間継続して当該研究を続けてきたということであるが、分析テーマに変化はなかったのか。

畑中:どのような研究であっても、最初からゴールが分かっている、それに向かって問いが立つわけでは

ないと思う。報告者の研究も現在の形になるまでに紆余曲折あり、分析テーマも変化していった。M-GTA 研究会での SV や、研究会後の分析、フィールドワークの知見が少しずつつながっていった結果、現在の形になった。

・H氏:M-GTA 分析結果をいかにして活用するかに悩んでいたのが参考になった。

・H氏:分析テーマが「巻き込みプロセス」であるのに、カテゴリーに「巻き込み」があることをどのように理解したらいいのか。

畑中:「巻き込み」の具体的な行動内容だけでなく、「巻き込み」がいかにしてなされるのかという前提の行動や、「巻き込み」後の展開までを含めての「巻き込みプロセス」であると考えている。

・I氏:本研究でいうミドルリーダーが、今後、トップリーダーへと成長していく過程があるのではないかと。その際、本分析結果のような経験をしていることが「よいトップリーダー」になるうえで重要になるようにも推察できる。

畑中:報告者もその可能性に期待している。現在関わっているミドルリーダーを対象とした研修は、管理職候補者育成の意味合い強い研修でもあるため、将来、当該研修受講者が管理職になった際、自身がどのようにすれば効果的に「巻き込まれる」のか、それがどのようにミドルをサポートすることにつながるのか、といった理解を促すことになるのではないかと考えている。ただし、まだそこまでの応用には至っていないため、今後、実践・検討を続けていきたい。また、勤務校の性質上、ミドルリーダーだけではなく管理職に対しても研修をする機会があるため、管理職に対して「巻き込まれる」ことの重要性を伝えてもいる。

I氏:本分析結果のプロセスが回ることで、組織の「空気」が和やかになるように感じる。そして、それがひいては子どもたちへと返っていくことになり、その意味で、本研究の知見は広がりがある印象を受けた。

【感想】

M-GTA 研究会へ飛び込み、始めて報告した約 10 年前から現在まで、ひたすら走り続けてきました。今回このような機会をいただくことで、一度立ち止まって「来し方」を振り返るとともに、10 年前の自分自身と出会いなおすことができました。また、フロアの方々や都丸先生、木下先生のコメントを受け、実践を続ける手ごたえを得るとともに、新たな研究テーマ設定の糸口もいただきました。ありがとうございました。

【司会者コメント】

都丸けい子 聖徳大学

今回、畑中先生が語られた「自著」は、本研究会の出版助成を受け、M-GTA モノグラフ・シリーズ 4 として刊行された「学校組織におけるミドル・アップダウン・マネジメントーアイデアはいかにして生み出されるか」でした。本シリーズは、M-GTA の応用例を研究成果で具体的に示すというコンセプトを有しています。そのコンセプトの通り、畑中先生のご著書では、学校組織のミドルリーダーが学校経営へと参画するプロセスを解明し、ミドルリーダー育成へと役立てる一連のプロセスが綿密な構成で綴られています。

シンポジウムの前半では、エスノグラフィーを用いたご研究に基づき、アイデア実現のために「巻き込み」がキーとなることを見出すまでの過程が紹介されました。つまり、「アイデア実現」というアウトプットに対して「巻き込み」がインプットとなることを突き止めるまでの過程です。インプットとアウトプットの過程でいった

い何が起きているのかを明らかにすることの必要性に触れた上で、続く後半では、M-GTA を用いたご研究に基づき、「巻き込み」の一連のプロセスを明らかにしていく過程が紹介されました。

畑中先生は、10年間本テーマに取り組み続けていらっしゃいます(厳密には「変えていくところ」もありつつ、「変わらないところもあった」とのことでした)。それは、畑中先生のご研究の特徴といえるでしょう。10年間同一のテーマを追い続けることができたのは、畑中先生の忍耐力と先見の明の賜物かもしれません。しかしそれ以上に大きかったのは、本研究テーマが少なくともこの10年間、実践現場で必要かつ有益な視点であるとみなされたためと考えられます。これはひとえに、研究の出発点が丁寧なエスノグラフィーから始まったためであったと考えられます。

畑中先生がエスノグラフィーに丁寧に着手されたことを象徴的に表しているのが、M-GTA に着手した当初の段階で分析テーマの絞り込みが上手くいっている点です。初期の段階で分析テーマを絞り込む際、しばしばSVから投げかけられる問いは「(これは)そもそもどういうことなのか?」です(この「そもそも論」に対峙したことのある人は、この問いへ回答することに、とても苦悩することをご理解いただけるでしょう)。畑中先生は初期の「そもそも論」に対して、苦悩しつつも真摯に取り組み、誠実に回答しています(畑中先生のお人柄そのものです)。その背景には、実践現場の人々を深く知ろうとしたエスノグラフィーの経験が生かされていたと考えられます。研究者が明らかにしたいプロセス、つまり研究の対象となる現象に向けられる研究者自身のまなざしと得られたデータの語りの中に大きな齟齬がないことは、M-GTA を用いるにあたって大きなアドバンテージになると気づかされた瞬間でした。

畑中先生のご著書である「学校組織におけるミドル・アップダウン・マネジメントーアイデアはいかにして生み出されるか」をご一読いただければ、私の感じた上記の気づきに改めて納得いただけるのではないかと思います。最後に、「自分と同じ研究内容でなくとも、参考になる論文を手元に置いておける良い」(木下先生による当シンポジウム閉会の言葉より)を紹介し、本コメントを閉じたいと思います。畑中先生、貴重なご経験を発表いただき、ありがとうございました。

◇第94回定例研究会

【日時】2022年2月12日(土)

【場所】オンライン(ZOOM)

【申込者】76名(五十音順) ※Zoomで所属先の記載があった方のみ所属先を記載しています。

朝日 まどか(北海道医療大学), 阿部 正子(名桜大学), 安藤 晴美(山梨大学), 石川 菜津美(東京大学医学部附属病院), 石渡 智恵美, 伊藤 祐紀子(長野県看護大学), 井上 みゆき(和歌山県立医科大学), 岩根 直美(和歌山県立医科大学), 内野 真由美(東京武蔵野病院), おおつか なおこ(大正大学), 小蒲 京子, 岡本 かおり, 奥山 洋祐(武蔵野大学大学院), 小畑 美奈恵(早稲田大学), 恩幣 宏美(群馬大学), 勝又 あずさ(成城大学), 亀崎 明子(山口大学), 川口 めぐみ(福井大学), 菊地 真実(帝京平成大学), 木下 康仁(聖路加国際大学), 木村 由美, 熊谷 歌織(北海道医療大学), 倉田 貞美, 黒須 依子(九州保健福祉大学), 後藤 喜広(東邦大学), 後藤 由紀子(筑波技術大学), 小林 亜耶(埼玉県立大学), 小山 道子(日本医療科学大学), 坂本 智代枝(大正大学), 佐川 佳南枝(京都橘大学), 志岐 和紀(和歌山さくら支援学校), 島田 祥子(東京医療保健大学), 正田 温子(早稲田大学), 鈴木 聡子(千葉大学), 鈴木 泰子, 住吉 智子(新潟大学), 園川 緑(植草学園短期大学), 高

祐子(複十字病院), 高志 博明(L and P), 高橋 国法(東京都市大学), 田口 要人(産業医科大学), 竹下 浩(筑波技術大学), 玉川 久代(大阪青山大学), 丹野 ひろみ(桜美林大学), 千葉 洋平(岐阜薬科大学), 辻 あさみ(和歌山県立医科大学), 寺崎 伸一, 寺田 由紀子(帝京大学), 時田 純子, 仲田 莉果(筑波大学大学院), 長山 豊(金沢医科大学), 生天目 禎子(帝京大学), 根本 愛子(東京大学), 根本 ゆき, 信川 景子(北陸先端科学技術大学院大学), 橋本 友美(医療創生大学), 林 葉子((株)JH 産業医科学研究所), 林 圭子(国際医療福祉大学), 原 裕子, 原 理恵(純真学園大学), 百武 ひとみ(聖路加国際大学), MIWAKO HIRAKAWA, 廣川 恵子(川崎医療福祉大学), 廣田 奈穂美(筑波大学), 夫 博美(大阪信愛学院短期大学), 藤原 朋恵(九州産業大学), 堀越 香(群馬大学), 三國 牧子(九州産業大学), 宮城島 恭子(浜松医科大学), 宮崎 貴久子, 宮本 堯明, 安本 真弓(筑波大学), 山口 江利子(春日井市役所), 山田 典子, 依田 純子(山梨県立大学), 渡部 亜矢(山梨県立大学)

【第一報告】

石川 菜津美(東京大学医学部附属病院 こころの発達診療部)

Natsumi ISHIKAWA : Department of Child Psychiatry, the University of Tokyo Hospital

児童指導員が発達障害児の就学移行を支援するプロセス

The support process of staffs at child development support center for children with developmental disorders during the school transition

1. 研究の背景

これまで筆者は、児童精神科の心理士として主に幼児期から学齢期の発達障害児を対象とした療育支援や保護者相談を担当してきた。支援を行う中で、幼児期から学齢期にかけての就学移行期は物理的・対人的に大きな環境変化であるため、就学直後から不適応行動が生じることや、強い不安を子どもが感じる事例を経験してきた。一方で、幼児期は不適応行動が目立ち、幼稚園や保育所、こども園等(以下、園)で適応することが難しかった児童が、就学後は周囲の心配をよそに楽しく通学している場合もある。発達障害児が就学という大きな環境変化に適応できるか否かの違いを生む要因として、障害の種類や程度、学習カリキュラム、小学校の教員の関わり方など、様々な要素が考えられるが、就学移行期にその子どもの発達特性に応じた支援が提供されているかどうかということも、大きな要因になっている可能性がある。

我が国では身近な地域における支援の充実・強化を図る目的で平成24年に児童福祉法が改正され、就学前の発達障害児が通所してコミュニケーション支援や日常生活動作の訓練を受けられる「児童発達支援」の事業所の整備が行われた。その結果、児童発達支援事業所数は平成26年度から令和元年度にかけて多くの都道府県で2倍以上増加しており、それに伴って利用者数が大幅に増加している(厚生労働省, 2021)。児童発達支援は、「発達支援(本人支援及び移行支援)」「家族支援」「地域支援」から構成され、障害のある児童の個々のニーズに対し、認知や言語、社会性などの支援を個別または小集団で提供しながら、支援ごとのねらいを達成するために、総合的にアプローチするものである(厚生労働省, 2017)。特に、業務の一つである「移行支援」では、障害のある子どもの地域社会への参加・包容(インクルージョン)の考え方に立ち、障害のある子どもの発達状況や家族の意向をアセスメントしながら専門的

な知識・技術に基づいて後方支援を行うことが求められている。したがって、そのような児童発達支援事業所で勤務する児童指導員は、就学前後の発達障害児に対して専門的知識・技術に基づいた本人支援を実施するとともに、家族との面談や園、小学校など地域の関係機関との連携など、就学移行を成功させる上で必要不可欠な業務を行なっていると考えられる。

2. 先行研究の概観

就学移行期における発達障害児が抱える困難さや保護者の不安については、日本に限らず海外でも同様の指摘があり、調査が行われている。例えば自閉スペクトラム症児は不安や新しい環境への恐怖心を感じやすい (Stoner et al, 2007) ことや、新しい友人とコミュニケーションが取れずに孤立しやすい (Walker et al, 2012) ことが指摘されている。また、就学移行期の保護者は、学校関係者が発達障害に対する否定的な認識を抱いており、配慮に関する相談を進めることが難しいと感じている (Connolly & Gersch; 2016) ことや、小学校の担任は特別支援教育の知識が乏しいため、サポートが得られず無力感を感じている (Fontil & Petrakos, 2015) ことが指摘されている。

我が国では園と小学校間の連携が推進されていて (文部科学省, 2017)、就学支援シートと呼ばれる情報共有ツールを使用した連携 (河口, 2015; 越中ら, 2018) や、移行支援会議が実施され (赤塚, 2013)、その効果が報告されている。例えば赤塚 (2013) は、発達障害児が通常の学級に就学するにあたり、就学前から園や小学校の関係者がチームとなり、移行支援会議を繰り返し行うことで、児童の適応状態が改善し、保護者の不安が減少したとしている。一方で、障害がある幼児に関して、園が提供する情報が必ずしも小学校で活用されているとは限らないという引き継ぎ上の課題が指摘されている (文部科学省, 2017)。その背景の一つとして、園が伝えたい情報と小学校が伝えてほしい情報にズレが生じていることが挙げられる。例えば、就学支援シートの「配慮事項」に明記する情報は、園が伝える内容は指示を写真や絵カードで示すなどの視覚的な支援や、参加する活動の内容を子どもに事前に知らせるなどの活動の見通しをもてるようにする配慮であるのに対し、小学校が欲しい情報はパニックなど突発的事態における支援・対応の仕方であることが指摘されている (越中ら, 2016; 越中ら, 2018)。ただ、幼稚園教諭や保育士などの保育者は、発達障害に関する専門的知識が不足しているため自身の対応に不安を感じているという報告がある (河内・福澤・濱田, 2006)。そこで、保育者からの情報提供に加えて、発達障害に関する知識が豊富で、個々の発達特性に配慮した関わりを提供している第三の立場からみた視点を合わせることで、就学後も有用な情報共有が可能になると考えられる。

海外の状況については、棟方ら (2010) がアメリカ合衆国における「早期の子どもの専門家」の取り組みを紹介している。この「早期の子どもの専門家」は、Early Intervention Service Provider や Early Intervention Teacher などと称され、園や小学校の担当者とともに発達障害児の支援チームに入り、連携を行っている。この「早期の子どもの専門家」は、発達支援や家族支援を担うことが多いため日本における児童指導員と役割が最も近いと考えられる。アメリカ合衆国では、発達障害の早期発見・早期支援のシステムが整っていることもあり、幼児期に発達障害と診断された児童は早期発達支援のサービスを利用し、言語やコミュニケーション行動の獲得に向けた発達支援を受けることが一般的である。さらに、その支援の内容は児童一人一人のニーズに合わせた指導計画書である個別の教育計画 (IEP) に記載され、その内容に基づいて関係者同士がチームで話し合った上で就学先を決定している。したがって、そのような地域では「早期の子どもの専門家」が園や小学校などと連携しながら就学移行支援に関わるのが通例で、発達障害児の就学移行に大きな役割を果たしている。また、カナダにおいて就学移行を成功させる

ための要因を調査した Starr et al (2016)は、「関係構築」「コミュニケーション」「知識」「サポート」という4つのカテゴリーを抽出し、園や小学校、「早期の子どもの専門家」など関係機関同士で良好なコミュニケーションが取れること、学校関係者との関係を早期に築くことの重要性やフォーマル・インフォーマルな支援を利用しながら保護者が特別支援教育のシステムを理解することが、発達障害児の就学移行を成功させる要因だと指摘している。

前述のように、我が国でも身近な地域における支援の充実・強化を図る目的で、児童発達支援事業所の整備が行われ、幼児期に発達障害と指摘・診断された児童が、日本においては「早期の子どもの専門家」に最も近い役割を担うとされる児童指導員から支援を受ける機会が増えている。しかし、障害のある子どもの発達を支える児童指導員が、個々の児童の特性をどのように見極めて支援を提供しているのか、家族との面談や地域の関係機関との連携をどのような工夫のもとに行っているのか、明らかにした研究はない。

3. 研究目的

本研究では、児童発達支援事業所の児童指導員が、保護者や園、小学校と連携しながら、どのように就学移行期の子どもの発達特性に合わせた支援を行っているのか、そのプロセスを明らかにすることを目的とした。

4. M-GTA に適した研究か

本研究の分析方法でM-GTAを採用した理由として、以下の内容が考えられる：①人と人の直接的関わり合いが展開されている実践的専門領域であること(児童指導員の業務は子どもへの直接的支援だけでなく、保護者との相談や園、小学校との連携など間接的支援を含んでいるため、様々な社会的相互作用が生じている)、②研究対象とする現象がプロセス性を有していること(子どもが就学する前後で児童指導員の支援が異なる段階に進むことが想定される)、③就学移行期の発達障害児への支援は定まった方法論がないため、本研究の分析結果が児童発達支援の実践現場で活用、応用されることで有効性が検証され、分析結果が精緻化される展開が期待されること(木下, 2020)。

5. 分析テーマへの絞り込み

本研究における分析テーマは「児童指導員が発達障害児の就学移行を支援するプロセス」と設定した。本研究における児童指導員とは、障害がある未就学児に対して支援を提供し、児童発達支援事業所で勤務する者と定義する。指定の大学を卒業した者や幼稚園教諭の免許状、教員免許、社会福祉士、精神保健福祉士などの資格を有する者に加えて、児童福祉サービスの実務経験があるものに、児童指導員の任用資格が付与される。

また、本研究における発達障害とは、診断の有無は問わないものの、主に自閉スペクトラム症や知的障害、注意欠如多動症などの障害を表す。

6. インタビューガイド

インタビューガイドを以下に示す。

- ① 就学移行期の発達障害児への働きかけで意識していること
- ② 就学移行期の発達障害児の保護者への働きかけで意識していること

- ③ 関係機関との連携方法
- ④ 情報共有物(就学支援シート等)の活用方法
- ⑤ 就学移行がうまくいった事例・うまくいかなかった事例
- ⑥ ⑤の時の対応方法
- ⑦ 機関または自治体独自で行っている就学移行の取り組み

7. データの収集方法と範囲

本研究における研究協力者は、児童発達支援事業所で勤務する児童指導員6名であった。研究協力者は、年長及び小学1年の発達障害児を1年以上担当したことがあるという条件のもと、縁故法で募集した。本研究の研究協力者が所属する児童発達支援事業所は、児童発達支援に加えて放課後等デイサービスまたは保育所等訪問支援などの事業を行っており、研究協力者は未就学から小学校の児童を支援する機会があった。各研究協力者とは2021年5月～8月の間に半構造化面接を実施した。インタビュー時間は44分から59分で、平均時間は50分45秒であった。

Table 1 研究協力者の基礎情報

研究協力者	性別	年代	勤務年数	事業所の特徴
A	女	30代	6年	児童発達支援、市区町村独自の学齢期支援事業等
B	女	30代	13年	児童発達支援、放課後等デイサービス、事業所独自の訪問支援等
C	女	30代	15年	児童発達支援、放課後等デイサービス、保育所等訪問支援等
D	男	30代	10年	児童発達支援、放課後等デイサービス等
E	女	20代	3年	児童発達支援、放課後等デイサービス、保育所等訪問支援等
F	男	40代	11年	児童発達支援、保育所等訪問支援等

8. 分析焦点者の設定

本研究における分析焦点者は「就学移行期の支援にあたる児童発達支援事業所の児童指導員」とした。分析焦点者を上記のように設定した理由として、児童指導員は第三の立場として園や小学校、保護者の間の人間関係を客観的に俯瞰できるため、園と小学校の思惑や考え方、環境などの条件を見渡すことができるとともに、子どもの情報を提供する側と受け取る側のズレに気が付き、改善する方向に働きかけができると考えたためである。

9. 分析ワークシートの概念生成例

発表時に掲示

10. 理論的メモをどのようにつけたか

スーパービジョンを受ける前は、生成型思考ではなく、分類型思考に陥っていた。理由として考えられるのが、「この研究で何を明らかにしたいか」が曖昧だったことや、分析焦点者がぼやけていたため表面的な解釈になってしまい、データに密着していない浅い解釈になっていたことが挙げられる。その結果、理論的メモに記述した内容が非常に浅くなってしまった。ありきたりな概念しか抽出できず、説得力がない、

分析焦点者の動きが表現できていないカテゴリー生成になっていた。スーパービジョンを経て、分析焦点者の視点を常に意識しながら、具体例が語られた文脈や他の概念との関係性を深く考察し、得られた洞察を理論的メモに書く方法が学習できた。

11. 分析を振り返って

- 発表を申し込んだ時点では「調査協力者の職種が多岐にわたる場合の結果図のまとめ方について、助言いただきたい」ということが背景にあったが、今回スーパービジョンを受ける中で、そもそも「私がこの研究で何を明らかにしたいのか」が漠然としていたことで、研究全体が表面的な内容になってしまっていることに気がついた。
- 定義と概念名をつけることが難しく、既成概念やありきたりな名前をつけてしまうことが自分の課題である。今後も定例会に参加し続けることで感覚を掴んでいきたい。
- 今回は分析テーマや分析焦点者の設定に時間をかけたため、カテゴリー生成や結果図、ストーリーラインの検討には至らなかったが、スーパービジョンを経て進むべき方向性が明確になったと感じる。

12. 質疑応答およびコメント概要等

- 発表時は「就学移行支援に関わる支援者が親子の適応を支えるプロセス - 発達障害児の就学を支える児童指導員に焦点を当てて-」というタイトルで、明らかにしようとしているプロセスのゴールが見えないというご指摘をいただいた。また、分析テーマの「支援するプロセス」について、「支援」という用語が漠然としていて、対象者が何をしても「支援」ということになってしまい、データから遠くなっているのではないかと、というご指摘を受けた。確かに、データとの最初の接点を考慮すると「学校に溶け込む」など、子どもが問題なく学校で過ごせるよう児童指導員が奮闘している様子が感じられる。今回のニュースレターでは、タイトルを暫定的に「児童指導員が発達障害児の就学移行を支援するプロセス」と変更したが、今後はデータを見返し、よりデータに密着した分析テーマに変更していく。
- 「就学移行期を支援するプロセス」という分析テーマでは、相互作用の対象者が小学校教諭や保育士、保護者、子ども自身など多岐にわたってしまうので、分析テーマを絞った方がいいのではないかと、というご指摘をいただいた。児童指導員の業務内容が多様であるため、分析の進み具合によっては内容を整理する必要があるが、明らかになったことを現場に還元するためには、児童指導員の働きを総合的に捉えて分析を試みたい。

13. 感想

この度は貴重な発表の機会をいただき、ありがとうございました。今回の発表では、分析テーマについてご意見をいただき、分析を進める上での示唆を得ることができました。また、スーパーバイザーの倉田貞美先生には、何度もスーパービジョンを実施していただきました。「なぜ私がこのテーマを選んだのか」「この分析を通して何を明らかにしたいのか」という問いと繰り返し向き合うことは、本研究だけでなく博士論文の研究全体を考察し直すきっかけとなりました。ご指導いただいた倉田貞美先生には心から感謝申し上げます。また、世話人の先生方やご参加いただいた皆様には大変貴重なコメントをいただきました。この場を借りて、深く感謝申し上げます。ありがとうございました。

参考文献

- 赤塚正一 (2013). 通常の学級に在籍する発達障害のある児童の保育所・小学校間の移行支援に関する実践的研究. *特殊教育学研究*, 51, 311-319.
- Connolly, M., & Gersch, I. (2016). Experiences of parents whose children with autism spectrum disorder (ASD) are starting primary school. *Educational Psychology in Practice*, 32, 245-261.
- 越中康治・濱田祥子・朴 信永・八島美菜子・岡花祈一郎・中西さやか…山崎 晃 (2016). 障害のある子どもに関する就学前施設と小学校の連携についての実態調査. *幼年教育研究年報*, 38, 103-112.
- 越中康治・上田敏丈・若林紀乃・濱田祥子・岡花祈一郎・中西さやか…山崎 晃 (2018). 就学移行期における障害のある子どもに関する記録物の作成と活用に関する実態調査: 就学前施設と小学校を対象として. *幼年教育研究年報*, 40, 49-60.
- Fontil, L., & Petrakos, H. H. (2015). Transition to school: The experiences of Canadian and immigrant families of children with autism spectrum disorders. *Psychology in the Schools*, 52, 773-788.
- 河口麻希 (2015). 「就学支援シート」を用いた特別なニーズのある幼児の移行支援. *保育学研究*, 53, 174-184.
- 河内しのぶ・福澤雪子・濱田裕子 (2006). 統合保育が保育士に与える影響: K 市で統合保育を経験した保育士へのアンケート調査より. *産業医科大学雑誌*, 28, 337-348.
- 木下康仁 (2020). *定本 M-GTA: 実践の理論化をめざす質的研究方法論*. 東京: 医学書院.
- 厚生労働省 (2017). 児童発達支援ガイドライン Retrieved from <https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-12200000-Shakaiengokuyokushougaihokenfukushibu/0000171670.pdf> (2022 年 2 月 5 日閲覧)
- 厚生労働省 (2021). 障害児通所支援の現状等について Retrieved from <https://www.mhlw.go.jp/content/12401000/000801033.pdf> (2022 年 1 月 26 日閲覧)
- 文部科学省 (2017). 障害がある幼児の小学校への滑らかな移行のために Retrieved from https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/youchien/_icsFiles/afieldfile/2017/10/03/1396321_02.pdf (2022 年 1 月 25 日閲覧)
- 棟方哲弥・海津亜希子・玉木宗久・齊藤由美子 (2010). 諸外国における発達障害等の早期発見・早期支援の取り組み: 米国, 英国, フィンランドを中心に. *国立特別支援教育総合研究所研究紀要*, 37, 17-45.
- Starr, E. M., Martini, T. S., & Kuo, B. C. (2016). Transition to kindergarten for children with autism spectrum disorder: A focus group study with ethnically diverse parents, teachers, and early intervention service providers. *Focus on Autism and Other Developmental Disabilities*, 31, 115-128.
- Stoner, J. B., Angell, M. E., House, J. J., & Bock, S. J. (2007). Transitions: perspectives from parents of young children with autism spectrum disorder (ASD). *Journal of Developmental and Physical Disabilities*, 19, 23-39.
- Walker, S., Dunbar, S., Meldrum, K., Whiteford, C., Carrington, S., Hand, K., ... & Nicholson, J. (2012). The transition to school of children with developmental disabilities: Views of parents and teachers. *Australasian Journal of Early Childhood*, 37, 22-29.

【SV コメント】

倉田 貞美(浜松医科大学)

私が複数の職種や立場の人を分析焦点者に設定できるか否かという問題に直面したのは、石川さんが三例目でした。同様の迷いの中にある会員の方々のお役に立てればとの思いから、石川さんが今回のSVを通してどのように分析焦点者を決定していったのか、それによって分析ワークシートでのデータ解釈がいかに変化していったのか、その経緯を要約してお伝えしようと思います。

石川さんの応募時書類での研究テーマは「就学移行支援に関わる支援者が親子の適応を支えるプロセス」でした。石川さんは発達障害児の幼稚園・保育所・小学校(幼保小)間の就学移行に興味をもち、

支援者を対象としたインタビュー調査をして親子を支援するプロセスを検討したいと考えた、とのことでした。支援者(調査協力者)は、年長または小学1年の発達障害児を1年以上担当した経験がある幼稚園教諭・保育士・小学校教諭・児童発達支援事業所の職員計15名で、分析テーマを「就学にあたって支援者がそれぞれの立場から発達障害のある子どもと保護者の適応を支えるプロセス」として「分析の初期段階は完了しており、博士後期課程の定例発表会で結果と考察を発表している」とのことでした。今回の定例研究会で助言をいただきたい点は、①調査協力者の職種が多岐にわたる場合の結果図のまとめ方、②カテゴリ間、概念間の関係性について、であるとのことでした。

初めにいただいた発表資料には、研究目的とその背景について「幼児期は不適応行動が目立ち、園で適応することが難しかった児童が、就学後は周囲の心配をよそに楽しく通学している場合もある。この差はどこから来ているのか、支援者の立場から明らかにしたいと考え、本研究の着想に至った。」とあり、研究の「目的は就学移行期の発達障害児とその保護者を支える関係者を対象として、就学前後にかかわる際のプロセスを探索的に検討する。」ことだと説明されていました。

しかし、この文章では明らかにしたいことは「この差はどこからきているのか」で、研究目的は「就学前後にかかわる際のプロセスの探求とあるが、文章としてはつながらないこと、また、「就学前後にかかわる際のプロセス」も言葉としてよく理解できない表現であって、何を明らかにしたいのかが明確ではありませんでした。そこで研究目的の明確化から、SVとしてのやり取りを始めました。研究目的を改めて考えるということは、石川さんにとって、とりもなおさず分析焦点者についても一度検討することになりました。なぜなら、明らかにしたいことと、分析テーマや分析焦点者は連動するからです。

最大の焦点は、多職種幼稚園教諭、保育士、小学校教諭、児童発達支援事業所の職員(のちに児童指導員)からなる多職種を「支援者」とし、分析焦点者としたことの原因でした。支援者というのは非常に大きくなりですから、医師や心理士、もしかしたら祖父母などの親族、あるいは友人、同じ問題を抱える仲間も、いわゆる「支援者」に含まれても不思議がありません。その中で、石川さんはなぜ、支援者を幼稚園教諭、保育士、小学校教諭、児童発達支援事業所の職員(のちに児童指導員)に限定したのか、それは何故か、その理由、そうでなければ明らかにできないこととは何であるのか、一から再考していただきました。

SVの経緯について1. 分析焦点者の変更:支援者から児童指導員へ、2. 児童相談員に焦点を絞る理由:研究目的の再設定、3. 分析ワークシートの変化:分類から解釈へ、に分けてその経緯を紹介したいと思います。

1. 分析焦点者の変更:支援者から児童指導員へ

SVとして各著書の記載ページを示し、分析焦点者についての代表的説明を確認し、共有しました。

① 2007 ライブ講義 M-GTA

p63 p64 M-GTA ではその単位となる人を限定して(分析焦点者)、対象とする調査デザインといえる。(・・・例えばとして)木下らの研究では高齢夫婦世帯で妻を介護している夫、・・・佐川は効果の見られた統合失調症の入院患者と効果の見られなかった統合失調症の入院患者に焦点者を分けた、小倉の場合は特別養護老人ホーム入居者で新しい生活環境に初期適応できた高齢者とできなかった高齢者に分析焦点者を分けて分析している

p65 慣れない段階では分析焦点者はできるだけ限定しておく方が無難です。

p155 例えば、分析焦点者は大学病院に勤務する医療ソーシャルワーカーとか、乳幼児健診におけるべ

テラン保健師とかになる。

② 2003 グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践 質的研究への誘い

p138 特定の人間に焦点を置いてデータを解釈していく…

③ 2020 定本 M-GTA 実践の理論化をめざす質的研究方法論

p85～…例示に使っている高齢世帯夫婦における夫による妻の介護プロセスの研究では、その立場にある「夫」が分析焦点者になり…

p85～86 社会的に現実存在する特定の人たちを捉える視点である分析焦点者が導きとなる。

このように通常、M-GTA では「特定の人間」に分析焦点者を置くことが、研究実例を示しながら説明されています。そして、特定の人間に焦点を置くことが概念生成の際に極めて重要であることが、以下のように説明されています。

① p158 分析焦点者にとってはどういう意味になるだろうかという視点でデータを見ていく。

② p139 データを解釈するときに、その人間から見れば、あるいはその人間にとっては、これはどういう意味になるのかという観点で考える

③ p85 分析焦点者の視点の活用により、特定の立場にある人間の行動や認識、感情などを社会的相互作用の文脈で概念化する…

p87…特定の立場にある人の人間の行為や認識、感情などを社会的相互作用の文脈で概念化する

…

それぞれに教育背景や、立場も経験も役割も違う幼稚園教諭、保育士、小学校教諭、児童発達支援事業所の児童指導員では、実際の行為や認識、感情などはそれぞれ異なると考えられます。分析焦点者を多職種からなる「支援者」として同一にくるって、着目したデータ(語り)がどういう意味なのか解釈していくことができるのか、それはとても難しいのではないかと。そのような SV から問いかけられ、石川さんは既に自分が行った概念が分類的で、浅く、常識的、表面的なものになっていたことを、身をもって実感できたようでした。つまり、教育背景や、働きかける内容も立場も役割も異なる対象者をひとくくりにして、どういう意味なのかを解釈することはできなかったということです。その結果、表面的に分類することになり、分析が深まらなかったと実感したとのことでした。

児童発達支援事業所の児童指導員とは、石川さんの説明によると平成 24 年の児童福祉法改正によって就学前の発達障害児が通所してコミュニケーション支援や日常生活動作の訓練を受けられる「児童発達支援」の事業所として整備された比較的新しい事業所とのこと。近年、事業所数は大幅に増加し、それに伴って利用者数も大幅に増加している(厚生労働省, 2021)。そこで提供される児童発達支援とは、「発達支援(本人支援及び移行支援)」「家族支援」「地域支援」から構成され、障害のある児童の個々のニーズに対し、認知や言語、社会性などの支援を個別または小集団で提供し総合的にアプローチするものである(厚生労働省, 2017)。特に、業務の一つである「移行支援」では、障害のある子どもの地域社会への参加・包容(インクルージョン)の考え方に立ち、障害のある子どもの発達状況や家族の意向をアセスメントしながら専門的な知識・技術に基づいて後方支援を行っている。したがって、児童発達支援事業所の児童指導員は、家族との面談や幼保小など地域の関係機関との連携など、就学移行を成功させる上で必要不可欠な業務を行っていると、石川さんは説明しています。そこで、今回の研究では、児童発達支援事業所の児童指導員だけに焦点化することの意義を探ることとしました。

当初、前述の 4 職種を「支援者」とした背景には、複数職種間のグループインタビューの予定がコロナ感染症への配慮のため個別のインタビューに変更された事情があり、そのまま横滑りに複数職種を分

析焦点者としてしまった経緯があったとのことでした。しかし、個別インタビューに変更し、M-GTA を用いるのなら、その時点で分析焦点者とされている「支援者」についての検討、とりもなおさず研究目的、何を明らかにするのかを十分検討なされなければなりません。時間的な制約もあってこの検討が十分できなかったことが、研究全体を曖昧なものにし、SV を通して大幅な変更を余儀なくする原因となっていました。

2. 児童相談員に焦点を絞る理由:研究目的の再設定

「支援者」を対象とした研究背景、研究目的を、当然、児童指導員に焦点を絞ったものに変更しなければなりません。改めて、この研究の背景と、現実にはどのような問題があるのか、そして何を明らかにするのか、そのためになぜ児童指導員に焦点を絞るのか、について検討しました。**④1999 グラウンデッド・セオリー・アプローチ質的実証研究の再生** には、p180 グラウンデッド・セオリー・アプローチに適した現象の特徴は、大きく 2 点にまとめられる。まず第1に実践的領域が前提とされているのであれば当該領域において現実に問題となっている現象であり、提示されるグラウンデッド・セオリーがその解決あるいは改善に向けて実践的に活用されることが期待できる場合である。とあります。

石川さんが指摘する日本における発達障害児の就学移行期の支援の現状、および課題を要約すると、次のようになります。

- 1) 幼稚園・保育園・小学校(幼保小)間の連携が推進されている(文部科学省, 2017) こと、
- 2) そこにおける就学支援シートと呼ばれる情報共有ツールを使用した連携(河口, 2015; 越中ら, 2018) や
- 3) 移行支援会議の実施(赤塚, 2013)が効果を上げている が、同時に
- 4) 幼保が提供する情報が小学校で必ずしも活用されていないという引き継ぎ上の課題、
- 5) 幼保が伝えたい情報の記述と小学校が伝えてほしい情報にはズレがある

この 4) 引き継ぎ上の課題と、5) 求められる情報と提供される情報のズレが生じている現状に対して、石川さんが提示しようとしているグラウンデッド・セオリーがその解決あるいは改善に向けて実践的に活用されることが期待できるのかどうか、そのために分析焦点者を児童指導員とした意味は何か、明確に把握する必要があります。

石川さんは、欧米での取り組みを概観し、欧米では Early Intervention Service Provider や Early Intervention Teacher などと呼称される「早期の子どもの専門家(棟方ら 2010)」が、幼保小の関係者とは別に、就学移行の支援チームに加わり連携しながら就学移行支援に関わることが通例で、この「早期の子どもの専門家」が発達障害児の就学移行に果たす役割が大きいとの報告に注目していました。児童指導員もまた「早期の子どもの専門家」と同様に実際に保育にあっていた幼稚園教諭や保育士ではなく、これから直接担当する小学校教諭でもない第三の立場から発達障害児の就学移行支援にかかわるという点で、日本における児童発達支援事業所の児童指導員はこの「早期の子どもの専門家」に役割が最も近いと考えられます。

つまり幼保小間の連携をさらに進展させる上で、児童指導員は第三の立場から、引き渡す側と受け取る側の求める情報等のズレにも気づき等、4) 5) 等の課題改善に向けて双方の思惑や動きを見極め調整し就学移行支援をより良いものにするカギとなる存在である、と位置付けることができます。第三の立場だからこそ、両方の(引き渡す側と受け取る側の)思惑や考え方、環境などの条件を見渡すことができ、直接的な利害や立場に縛られることなく調整することができ、仲介者として働きかけることができるという点に注目しました。その児童指導員を分析焦点者としたグラウンデッド・セオリーは、4)、5)の現状に対して解決あ

るいは改善に向けて実践的に活用されることが期待できると判断できました。

さらに、障害のある子どもの発達を支える児童指導員が、個々の児童の特性をどのように見極めて支援を提供しているのか、家族との面談や地域の関係諸機関との連携をどのような工夫のもとに行っているのか、について明らかにした研究は現在見当たらないので、児童指導員の支援プロセスを明らかにすることは、就学支援の実際の場合でその改善に向けて実践的に活用される有用性が、大いに期待できると判断されました。その考えのもとで、研究目的も分析焦点者を児童相談員に変更することが決定されていきました。

3. 分析ワークシートの変化:分類から解釈へ

石川さんは、STT06 の次の語りに注目し、定例研究会の場で提示しました。

「一番大事なのは、学校と仲良くする。意見があっても、やっぱりすぐに言わないとか、結構すごく大事で、どんな先生も、当たりの先生もいるし、正直外れの先生も多いんですけど、(保護者が)仲良くするってすごく大事で、相手をやっぱり立ててあげる、とにかく微妙だな、なんだこいつ、って思っても、とにかく先生を尊重してあげないと、話を全く聞いてくれなくなるので、まずは喧嘩しない。(中略)「見てくださっているからこそ、お願いしたい」みたいな風に、甘え上手になってくださいっていつも(保護者に)言ってます。

STT06

その理由は、「【研究する人間】として保護者と学校の関係性をポジティブに保つことが、円滑に就学移行を進める上で重要だと感じているためです。振り返ると、子どもへの支援内容よりも「保護者」に関する言及がどの研究対象者も多くて、児童指導員は幼保小よりも保護者をエンパワーできる機会が多いため、就学移行で大切な役割を果たせると考えています。」と説明しました。ワークシートの定義は『児童指導員としての経験から、連携体制を築くためにはどんな先生であっても尊重することを保護者に伝える』で、概念名を『「まずは学校を立てる」ことを助言』とし、対極例として「学校と対決してもいいので、こちらの言い分を伝える」とあります。

これを読んで SV として私が注目したのは、<理不尽と思っても学校を立てる>と<伝えるべきは伝える>の天秤を図っている、まさに幼保小に属さない第三の立場で、状況を見渡し、時には保護者にくぎを刺し、時には学校との対立も辞さないで<伝えるべきは伝える>という時を見定めようとしている、その微妙な動きでした。それで理論メモに、SV からの理論メモの例示として<定型の親(発達障害児の親ではない)よりも「学校を立てる」ことを意識しないといけないのか。「学校と対決してもこちらの意見を伝える」との分岐点はどこだろう?どこまでなら、「なんだこいつ」と思っても、言わずに先生(学校)をたてるのか?そのことについての語りはないだろうか確認(倉田 2/2)>と追記させてもらいました。

そのあと、石川さんはさらに<相手をやっぱり立ててあげる(STT06)〉のはどんなケースの時なのか。どういう先生のタイプなのか。「話を全く聞いてくれなくなる」のを予防するために、駆け引きをしながら相手を立てて、配慮の話し合いを進めていく、ということなのか。これは児童指導員が学校と連携した経験から導かれるアドバイスなのかもしれない。児童指導員自身も「仲良くしなくちゃ連携ができない」「**小学校に受け入れてもらえない**」という経験があったのだろう。(2/7)。>と解釈の幅を広げています。

児童指導員が独自に果たせる役割って何だろう? どんなふうに児童指導員はズレを改善したりしていくのか?という視点で、この先、更に分析を進めていくと、もしかしたら、<学校を立てる>と<伝えるべきは伝える>の間に、見計らいながら流動的に選択していく<仲介行動>みたいな概念が関わっているのが見えてくるかもしれません。仮の概念ですがこの三つの概念の動きは非常に流動

的で、児童指導員でなければここぞというときの判断はできないと思われます。どんな時がここぞという分岐点なのだろうか、障害といっても様々で子どもの特性、家庭環境、教員の特性も大きく影響するのだろうと、とても興味がわきます。

初めのころに示された同じデータへの理論メモには、「関係機関に関する語り。「学校とうまくやれる」という保護者の関わり方が子どもの適応に影響しているのか(1/27)」とあり、他のデータへの理論的メモにも「子どもの課題内容に関する語り」とか、「保護者に関する語り」と記されており、非常に分類的でした。それが、なぜ分析焦点者を児童指導員にするのか、その理由が石川さんの中で明確になったことで大きく変化してきています。現時点では、定義を『児童指導員としての経験から、連携体制を築くためにはどんな先生であっても尊重することを保護者に伝える』とし、概念名を『「まずは学校を立てる」ことを助言』としていますが、この先きと、この定義も概念名も精選されていく予感がします。

概念についての SV はここまでで時間切れでしたが、今回の定例研究会での発表を生かして、多くの児童指導員が応用できるグラウンデッド・セオリーを提示していただき、発達障害児へのより良い就学支援の実現に大きく寄与してくださることを期待しています。

【第二報告】

宮本 堯明(東京武蔵野病院)

Takaaki MIYAMOTO : Tokyo Musashino Hospital

持効性注射製剤(LAI)に対する統合失調症患者の意味づけの変化に関する研究—病気を否認しながらも持効性注射製剤の継続投与に至るプロセスを明らかにする—

Changes in the meaning of schizophrenic patients for LAI -The process of continuing LAI while denying illness-

1. 研究テーマ

我が国の精神科医療の現状として、精神科病床ならびに医療費削減という目標を掲げている。精神病床における入院患者数は約 28.9 万人であり、精神科病床数は過去 15 年間で約 35.8 万床から 33.8 万床(約 2 万床)に減少(全病床数(約 168 万床)の約2割)している。平成 29 年2月の「これからの精神保健医療福祉のあり方に関する検討会」報告書では、「地域生活中心」という理念を基軸としながら、精神障害者の一層の地域移行を進めるための地域づくりを推進する観点から、精神障害者が、地域の一員として、安心して自分らしい暮らしができるよう、医療、障害福祉・介護、社会参加、住まい、地域の助け合い、教育が包括的に確保された「精神障害にも対応した地域包括ケアシステム」の構築を目指すことを新たな理念として明確にしているが、平成 30 年時点の報告では、精神科病床からの退院患者の再入院率は、退院後 6 ヶ月時点が約 30%、1年時点が約 37%であり、平均在院日数は 274.7 日である。精神障害者が地域で安心して自分らしい暮らしを実現させるためには、精神障害者が継続して医療にかかわる体制、症状再燃ならびに増悪による再入院の予防としての医療提供の在り方を検討していくことが必要である。

本研究の目的は、入院中の統合失調症患者が持効性注射製剤(Long Acting Injection:以降 LAI)を選択し、病気を否認しながらも継続投与に至るまでの意識変化を明らかにすることである。この意識変化をもって外来通院を継続するようになることを考える。

統合失調症に限らず、精神疾患を抱える患者は、服薬を継続することで病状の安定を保たれているが、患者は期限のない服薬管理を否応なしに生活を送るなかで課され、疾患教育や、訪問看護サービスなど第三者の力を借りる服薬管理のサポートを受け、地域生活の安定化を図っている。地域移行支援事業をもって長期入院患者の退院支援が進む中で、いかに再入院せずに外来通院を継続し、地域生活を送ってもらうかを考えることが現在の精神科医療が担うべき重要な役割の一つである。そうしたなかで LAI は、外来における維持療法としての役割が期待されているのは既知の事実であり、有用な治療戦略の 1 つとなっている。しかし、拒薬や病識がない患者に対して強制的に使用されるという負の印象はまだ強い。

当院は、都下および近県における精神疾患患者、また、精神科救急および急性期病棟においては、措置入院、二次救急ルートをもって入院加療が必要と判断された未治療、治療中断患者を積極的に受け入れており、病棟 PSW として退院後の治療継続をいかにして成立させられるかを熟慮して日頃から業務に当たっている。統合失調症の治療目標は、精神症状および社会機能の改善から、主観的満足感を重視したリカバリーへと転換してきており、「臨床的リカバリー」と「パーソナル・リカバリー」という区分でわけて整理されている^(4,5)。特に「パーソナル・リカバリー」が注目されており、患者個人にとって、リカバリーは夢や希望にたどり着いた結果というより、結果に行き着くまでのプロセスであり^{1,2,3)}、支援者は患者が希望する、自分になるための「プロセス」とその自分になった「結果」の 2 つの側面を見る必要がある^{4,5)}。そうした中で、入院中より LAI を選択し、退院後も引き続き外来にて投与を続け、LAI という服薬に対して肯定的に意味づけ、再入院することなく外来通院により地域生活を維持している患者を多く確認している。これら当事者の変化がなぜ起こったのか、LAI を選択し継続するようになるまで意識の変化およびそのプロセスにはどのような体験が影響しているのかを明らかにすることを目的として本研究に取り組みたいと考えた。そして、当事者のケアニーズを明らかにしたうえで今後の再入院を防ぐための退院支援の示唆を得たいと考える。

先行研究では、複数回エピソードのある患者が治療をやめた場合、1 年以内の再発率は 74%といわれており、初発の統合失調症患者で 2 年以内に約 53%が、5 年以内に約 82%が再発すると報告あり⁽⁶⁾、また、怠薬のみが再発の原因ではないが、服薬自己中断や副作用の回避などによる服薬アドヒアランスの低下によって、再発が生じることは多く、数日間程度の服薬アドヒアランスの低下によっても、一部の患者では入院に繋がるリスクが高くなったり増悪する可能性すら指摘されている^{(7)~(9)}。

実際、当事者による当事者の生活の質向上をめざす NPO 法人全国精神障害者ネットワーク協議会調査研究事業部が出版している「精神科薬とリカバリーの現状 2012 年度版」⁽¹⁰⁾によれば、病気や薬の影響によって日常生活で困っていることの 1-3 位は、(1) 勉強や仕事(作業)をすること、(2) 毎日決まった時間に起きること、(3) 人と話すこと、である。さらに同調査によると精神疾患によってあきらめたことの上位 3 つは、1、就職、2、結婚、3、自動車の運転であった。また、ひだクリニックにおける、本人の立場から見た LAI 治療のメリット・デメリットの研究⁽¹¹⁾では、メリットは、Free from pills.となった心理的な解放感、不快な鎮静感がないこと、集中力が戻ったことを好意的にあげる例が多かったとし、デメリットとしては、高価なこと、痛み、手技的な問題も挙げられていた。また同時に、リスペリドン持効性注射剤(以下:RLAI)に関する報告も行っており、RLAI 総投与回数が多い患者ほど RLAI 治療に対する満足度と RLAI 治療継続希望度が高く、「毎日薬を飲む手間がなくなる」「生活が楽になる」「症状が安定する」「身体が軽くなる」などの項目において、患者の RLAI 投与回数によって差がみとめられたと報告しており、RLAI と心理教育を組み合わせた治療を実施しながらも治療中断へと至ったアンケート実施時の全 6 例の総投与回数を調べたところ、投与 5 回未満での中止は 5 例、10 回未満での中止が 1 例、10 回以上の投与回数で中断した症

例は認められなかったため、「10回頑張ってみます」という同意書を交わして投与を行っている。そのなかで投与開始から5-6か月後あたりまでで患者の多くは治療の必要性や重要性を理解し、治療満足度を得ているのではないかと仮説を立てている。そして、障害受容ができており、患者が自分の意志で主体的にLAI治療を選択するという患者も確かにいるが最初は消極的な選択決定であっても治療を継続していくうちにその治療の効果を実感して継続を希望するような例も多い、としている。

ケアニーズに関する文献レビューは、ピアの経験談を共有することによりLAIに対する不安解消につながった⁽¹²⁾という報告もあるが、あくまで研究対象を外来にてLAI導入している患者としており、本研究のように、入院歴のある患者が退院後もLAIを選択し通院を続けている患者を対象とした研究および選択時、選択後のケアニーズを明らかにしている研究は見当たらなかった。

2. M-GTAに適した研究であるかどうか

本研究が、方法論としてM-GTAを採用することが適した研究であることを次に述べていく。①人間と人間が直接的にやり取りする社会的相互作用に関わる研究であり、本研究においては、入院患者が精神科病院の治療病棟という空間において医師や他患者と直接的にやり取りを行い、また、入院患者を取り巻く他の医療スタッフや家族とのやり取りの中という相互作用に関わる研究である。また、②研究対象とする現象がプロセス的性格を持っている入院患者が医師、他患者、家族、他医療スタッフとの相互作用の中、退院後も通院し続けるという行動形成における意味づけの変化プロセスモデルを提示することに関する研究である。そして、本研究は、③ヒューマンサービス領域である、精神科病院における入院治療という臨床現場における治療提供という意味から、ヒューマンサービス領域ととらえられる。最後に、④理論生成への志向性として、研究から得られた結果から一般理論を導き出すことによって、今後の精神科医療に関わる医療従事者の実践に活かされることが期待できるという点が、方法論として採用した理由である。

本研究は、入院患者との社会的相互作用の中で生じる変化のプロセスについて、対象者の語りに基づいて理論生成することを目指している。つまり、入院患者が変化のプロセスを経ていることを、精神科病院スタッフは経験上からの、ある程度の予測をもって支援を行っている。しかし、現在のところ、それを理論化したものはない。医療の主体である対象者の語りから理論化を試みることは、臨床実践において、ひとつの指標となり今後の実践的活用の可能性は大きいと考える。

本研究では、変化のプロセスを知ること重点をおいているためその他の質的内容分析の分析方法を採用しなかった。プロセスを明らかにすることを目的とし、対象者が入院中にLAIを選択し、退院後もLAI投与をもって通院を続けている者と限定していること、医療実践に連動しやすい結果が導き出せることから、M-GTAが適していると判断した。

3. 分析テーマへの絞込み

本件研究の分析テーマは、研究目的と同様に、「入院中の統合失調症患者が注射製剤を選択し、病気を否認しながらも継続投与に至るまでのプロセス」を明らかにすることとした。入院中にLAIを選択した対象者がいかに意味づけを変えていくのか、LAIの選択ならびに投与を続ける中で、対象者がLAIの選択をプラスに考え、主体的な投与に至るようになるまでになった出来事に絞り込んでそのプロセスを明らかにしていくことをテーマにすることも検討したが、対象者の語りから意味づけの変化プロセスに注目した先行研究は見当たらないため、必ずしも投与や意味づけという行動がポジティブな理由や出来事のもとになされるものではないということから絞り込みを行わず、入院治療開始からLAIを選択、病気を否認しな

がらも継続投与に至るまでの全体的なプロセスをとらえることを目指し、このテーマとした。

4. インタビューガイド

インタビューガイドは、入院中の統合失調症患者が LAI を選択し、異常な人と見られる「病気」からの解放を願いながら継続投与に至るまでの体験や出来事を話してもらう中で、LAI に対する思い・考え、治療や生活に関する気づき・考え、それらに影響した医療者からのサポート、医療者からのサポートについては、実際に得られた支援だけでなく、得たかった支援についてもインタビューする。

<インタビューガイド>

- ① LAI を選択されたのは、いつ、どのような経緯があって選択されたか教えてください。
- ② LAI を選択したいと思って選択されましたか。
- ③ LAI を選択して良かったと思う出来事がありましたか？その前後の違いを教えてください。
- ④ それは、LAI を選択されて良かったと感じるようになったのはどの時点から感じていますか？
- ⑤ 外来通院するにあたって困難な場面はありました？どういった場面でしたか？
- ⑥ なぜ外来通院にて注射投与を辞めずに、また、中断せずに打ち続けてこられたとお考えですか？
- ⑦ 投与し続けるうえで、どのようなサポートがあなたにとって助かりましたか？
- ⑧ 投与し続けるうえで、受けたかったサポートはありますか？それはどのようなことですか？
- ⑨ 将来の夢や希望はありますか？それは何ですか？
- ⑩ 自分の夢に希望を叶えることと、LAI および外来通院は関係がありますか？それは、どういったところで
すか？
- ⑪ 今まで外来通院してきた中で、印象に残っていることは何ですか？

5. データの収集法と範囲

研究デザイン: 半構造化インタビューによる質的研究

研究対象者: 入院中に持効性注射剤(以下:LAI)選択投与後、LAI 投与をもって外来通院を継続している(6か月以上)統合失調症患者7名

データ収集方法: 上記研究対象者にインタビューガイド(別紙)をもとに 30分~60分程度の面談を行う。面談内容は研究協力者の同意を得たうえで ICレコーダーに録音する。なお、インタビューは、病院 PSW である筆者が行うため、インタビュー結果にバイアスが生じる可能性は否定できない。但し、インタビューガイドに基づいて研究対象者に自由に語ってもらうことを順守し、できるだけインタビュー内容に歪みが生じないよう配慮をしていく。

データ分析方法: インタビュー内容を ICレコーダーに残し、その音声記録から逐語録を作成し、録音の許可が出なかった調査協力者のインタビュー内容は、インタビューを実施した筆者が内容の記録を行ったものを分析する。分析方法は、対象者と医療者間の社会的相互作用の中で、対象者が変化していくプロセスをもつ現象について、データに密着した理論を構築するために、グラウンデッド・セオリー・アプローチ(GTA)を用いる。そして、対象者は精神疾患をもち、独自の言語表現や解釈をする場合もあり、対象者が語るオリジナルな文脈を重要とするため、切片化をしない修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(M-GTA)の手順を用いる。分析テーマを「入院中の統合失調症患者が注射剤を選択し、病気を否認しながらも継続投与に至るプロセス」に、分析焦点者を「入院中に LAI を選択、退院後も外来通院にて投

与を続けている統合失調症患者」に設定し、LAI を投与し続けている目的、過程・印象的な出来事などを質問しカルテも資料にする。分析手順は、データの中からディテールが豊富なものを選択して、そのデータから分析を開始する。逐語録の着目した部分をワークシートの具体例の欄に、その意味を定義欄に、さらに凝縮したものを概念欄に記入して分析ワークシートを作成する。概念生成は、同時並行的に他の概念との関係を検討して行う。関係性のある複数の概念からカテゴリーを、さらにカテゴリーの中でもコアとなるコアカテゴリーを生成する。概念、カテゴリー、サブカテゴリー、コアカテゴリーの関係や変化のプロセスを結果図として図式化し、それを説明する文章にする。

6. 分析焦点者の設定

分析焦点者の設定としては、「精神科病院入院中に注射製剤を選択、退院後も外来通院にて投与を続けている統合失調症患者」とした。データ範囲の方法論的限定としては、対象者の条件として、「統合失調症」と主治医から診断を受けている者とし、統合失調症の社会復帰の関門として断薬、怠薬による治療中断、症状再燃からの再入院という問題があり、支援する医療従事者が困難を抱えているという観点からも意義があるのではないかと考えた。

また、対象者は、現在も外来通院にてLAI投与を続けている者とし、症状を抱えながらも、自ら進んで、また何らかの困難な経験があっても、通院を続けLAI投与を続けていることを重視した。これにより、LAI投与における意味づけの変化を分析する上で、動機の在り様(インセンティブ)とプロセス性を強調できる表現になるのではないかと考えた。また、分析焦点者は、分析結果として提示するグラウンデッド・セオリーに当てはまる範囲とする。

7. 現象特性

現象特性は、「(注射を打ちに病院に)行きたくないが、(健康を維持するためには)行かなくてはならないときがある。しかし、(打ちに)行ったらしばらく行かなくてよい」とした。この現象特性と同じごきの特性がみられる場合として、身体疾患を抱える者(例、透析治療、糖尿病におけるインスリン注射)、予防接種、健康診断や定期健診の対象者など、他の臨床医学や予防衛生といった分野においてもあてはまる可能性が考えられる。

8. 分析ワークシート:

ワークシート例は、分析をおこなっていく際に生成した概念であり、すべての研究対象者から語られた内容に基づいている。また、他の概念間関係が多くみられ、プロセスの転換点になり得るため結果において不可欠であると考えた。(当日投影資料に掲載。)

9. カテゴリー生成:

カテゴリー生成の上では、まず現象特性に照らして考えるところから始めた。カテゴリー例とした理由は、このカテゴリーが転換のきっかけとなる起点になると考えたからである。概念間関係は、理論的メモとワークシートを用いて検討した。対象者の変化と、周囲から対象者へのかかわり、相互作用により生じたことを整理し、関連する概念と、その概念に対極する概念を検討した。また、イメージした図において関連する概念は何か、その関係はどのようなカテゴリーとして示せるのかという視点で検討した。(当日投影資

料に掲載。)

10. 結果図:

当日投影資料に掲載。

11. ストーリーライン:

当日投影資料に掲載。

12. 質疑応答、およびコメント概要等

●研究対象者について

病識の有無で分けたかのご質問をいただきました。特に病識の有無で対象者を分けたわけではなく、対象者の方々がインタビューの中で病気に罹患していること否認していた語りが印象に残り、分析テーマや副題においてしまいました。あくまで対象者ならびに分析焦点者は、「入院中に LAI を選択、退院後も外来通院にて投与を続けている統合失調症患者」となります。

●分析テーマについて

分析テーマ「～病気を否認しながら～」の設定に関しまして、“「病気を否認しながら」というよりも精神の「病気」や普通ではない人、異常な人と見られる「病気」から解放されたいと願いながら継続投与している人という方がピッタリくる“とのご意見をいただきました。分析を行っていくなかでそういった思いを表す概念も生成されるのではないかと考えています。副題については検討していきたいと思えます。

本来分析テーマとはその分析で自分が明らかにしようとする問いに当たり、データ全体をオープンにみていくためのものであると今回学び直しまして、狭めたテーマ設定によりその範疇でのデータ分析となり深い解釈が阻まれてしまう可能性もあるということ踏まえ、分析テーマを広くとることで分析焦点者の視点を連動させ深い解釈を導けるのであれば、「入院中の統合失調症患者が注射剤を選択し、継続投与に至るプロセス」と平易な表現にて設定しても良いのかもしれないと考えました。

●概念生成について

分析ワークシートの理論メモ・ノートにおける、「病気の人ー健康な人」という言葉で処理してしまうことで、統合失調症患者がもつ独特な、社会から受ける「圧」の意味が薄れてしまうのではないかと。身体科の病気（高血圧や糖尿病）を治療する意味と、統合失調症患者が治療する意味、本人にとっての病気の意味は果たして同じものであろうか。注射を打つことで病気に引き戻されて悲壮感を身体科の疾患を治療されている方々はあまり感じなくて済んでいるのではないかと。注射を受け入れて社会的評価の負の圧から本人が逃れられない現実があるのではないかと。社会から受ける「圧」や、自身の負の感情から逃れられない苦しさも対象者らは感じている、そこを深く分析することで分析が開けてくるのではないかとのご助言、ご指導をいただきました。

また、統合失調症患者が語る健康と普通は同じだろうか。理論メモにある「普通の人≡健康な人」と引っ掛かっているところからも、慎重に深めてみるのはどうか、対義語で考えてみることはどうか。「普通」の対義語は、稀有、特別、異常…。薬を飲めば健康になる、薬を飲んだら普通になる。では、薬を飲まなかったら何になる??を考察することが必要ではないかと。対象者らの普通とは何か?薬を飲まなかった時に普通じゃない…普通じゃないっていうのは何なのか?という視点で考えてみることで分析がより深まっていくのではないかとのご助言・ご指導をいただきました。

発表の中で取り上げていただきました、概念生成における分析ワークシート内の理論メモ・ノート中の「普通の人≒健康な人」に関しまして、私自身も分析を行っているなかで“引っ掛かり”を感じていました。しかし今回、先生方、発表会へ参加されている皆様からのご質問・ご助言・ご指導をいただきまして、やはり核となり得る重要な部分であるはずであるとの確信を持つことができました。そして、分析焦点者の思いや感情がどこにあるのかを大切に分析していく必要があることを再認識いたしました。

●ストーリーラインについて

「対象者が・・・対象者が・・・」と続けていたように思う、つまり対象者とみている。対象者であるがゆえに健康かそうでないかという問題が出てきていたのではないかと、視点の置き所に留意することで分析が見えてくるものがあるのではないかとのご助言、ご指導をいただきました。分析焦点者の視点に立つことを意識していたはずですが、分析焦点者の視点から離れた位置での視点に立ってストーリーを並べてしまっていたように思います。初心にかえり改めたいと思います。

●結果図について

ストーリーラインが良いものであったが概念図では示しきれていないことが残念。対象者らに見せた時に納得してもらえる結果図を目指すのであれば概念、カテゴリーを意識し工夫していけると良いですねとのご助言・ご指導をいただきました。相互作用も当然ながら、置かれている状況や人や薬との関係性、社会的な評価および文化等に注目した結果図を作成できるよう、概念やカテゴリーの見直しから取り組んでいきたいと思います。

また、結果図が完成したら現場でどのように使われるかのご質問をいただきました。現場におけるスタッフと共有し、介入やアプローチのポイントについて課題を抽出し必要な改善点があれば修正していきよう工夫をしていきたいと考えます。また、研究に協力してくださった対象者の方々に見てもらいプロセスの確認をともにできればと思います。

●木下先生よりコメントいただきました

経口薬、注射製剤薬の違いとして、対象者らが薬と接することで「病気」を自覚することになる「期間」以外にも違いがありそうか。また、分析テーマに「注射製剤」を入れているということであれば結果図にそれが反映されているととても分かりやすいのではないかと。注射製剤薬により、統合失調症患者の受け止め方、考え方といったものにどのような影響が生じているか、注射製剤薬が特別な媒介要素になっているものかのご助言・ご指導をいただきました。注射製剤薬が対象者らに対して「薬」以外にも何かしらの特別な媒介要素をもっている、働いていると考えます。どのような媒介として影響を与えているのか等、これから分析を進めていくうえで意識していきたいと思っています。

13-1. 分析を振り返って(発表前)

理論的メモ・ノートの取る際には、臨床現場において対象者の語りにある背景を頭の中に起きながらメモを取ることを心掛けた。はっきりと語られていない部分に関しては推測が先行してしまいこともあったため、仮定義とおおむね合致する他のバリエーション探しに努め、相互作用がどういった際に生じているかも気にしながら分析に臨んだ。ワークシートを用いた分析の初期段階は、定義と具体例、概念と具体例の内容がかけ離れてしまうことがあった。そのため、最初に注目したバリエーションに立ち返り、再度の定義の見直しを行い、次のバリエーション選びに留意した。

また、理論メモ・ノートには「なぜその部分に着目したか」を記述して、具体例に繰り返し戻すことを心掛

けた。当初分析テーマを「意味ある投与に至るまで」「主体的な投与に至るまで」と設定して分析を進めていましたが、SVの佐川先生からご指導いただき、果たして対象者らが主体的な投与に、また主体的に病院に来ているのかとご助言いただいたところから見直し、必ずしもそうではないと理解が進み、今一度現象特性を確認してみるところから立ち返ることができたと思います。分析テーマを修正して再分析を進めてきましたが、自身の中で設定が揺らいでいたことも事実であるため、発表を通して検討していきたいと思えます。

13-2. 分析を振り返って(発表後)

分析焦点者の方々は、統合失調症という「病気」がもたらす症状による生きづらさに苦しまれ、同時に、社会や周囲から奇異な目で見られる、異常と見られるという(そう見られていると思ってしまう)、この「病気」が作り出した二重の生きづらさに苦しんでいると思われまます。今回分析を進めていく中で、また発表を通し、統合失調症という、精神病という「病気」に囚われ、逃れられない現実を生きる対象者が、注射製剤薬という媒介を通すことで異常な人と見られてしまう「病気」から解放され、普通に在りたいと願う注射投与を続けているのではないかというイメージを持つことができました。発表時には概念として提示はできませんでしたが、分析過程において“スティグマ”や“セルフスティグマ”という概念生成の経緯もありましたが、今回の発表と皆様からのご助言、ご指導をいただき、単語を容易に用いて解釈することの危うさを感じるとともに、わずかではありますが、分析焦点者の「病気」とのつながりの本質に触れられたように思います。

対象者らが LAI を投与することで何を得ているのか、社会的な評価や圧力、偏見から逃れられない現状をどのように整理しているのか。そして、これらを結果図にいかにかに反映させられるか。引き続き分析に努めていきたいと考えています。

14. 感想・謝辞

この度は貴重な機会を頂きまして本当にありがとうございました。皆様からのご質問やご意見から、自分では気付くことのできなかつた多くの視点を得ることができました。

お忙しい中、お時間を頂き SV をご担当いただきました佐川佳南枝先生には大変丁寧にご指導いただき深く感謝申し上げます。また、研究会に先立ち、事前に資料を読んでもらいました世話人の先生方、研究会開催にあたり調整してくださいました皆様、ご質問やコメントを頂きました皆様、発表を聞いてくださった皆様に感謝いたします。最後に、本研究会へ誘ってくださいました坂本智代枝先生に感謝申し上げます。ありがとうございました。

文献リスト:

- (1) President's New Freedom Commission on Mental Health: Achieving the promise: transforming mental health care in America—Executive summary of final report (Rep. No. DMS-03-3831). Department of Health and Human Services, Rockville, 2003.
- (2) Leamy M, Bird V, Le Boutillier C, et al: Conceptual framework for personal recovery in mental health: systematic review and narrative synthesis. Br J Psychiatry 199:445-452, 2011.
- (3) Repper J, Perkins R: Recovery and social inclusion. Callaghan P, Playle J, Cooper L (eds): Mental health nursing skills, Oxford University Press, Oxford, pp85-95, 2009.
- (4) Thornicroft G, Slade M: New trends in assessing the outcomes of mental health interventions. World Psychiatry 13:118-124, 2014.
- (5) 山口創生, 松長麻美, 堀尾奈都記: 重度精神疾患におけるパーソナル・リカバリーに関連する長期アウト

- カムとは何か. 精神保健研究 62:15-20, 2016.
- (6) 岩田仲生、藤井康男、和気裕志 他: 本邦における統合失調症の再発予防に関する認識と取組みの実態—統合失調症再発予防研究会アンケート調査 512 名の結果より. 臨床精神薬理, 15:785-796,2012.
 - (7) Kane,J.,Aguglia,E.,Altamura,A.C.et al.: Guidelines for depot antipsychotic treatment in schizophrenia. European Neuropsychopharmacology Consensus Conference in Siena. Eur. Neuropsychopharmacol., 8(1):55-66,1998.
 - (8) Lieberman,J.A, Perkins,D., Belger,A.et al.: The early stages of schizophrenia: speculations on pathogenesis, pathophysiology, and therapeutic approaches. Biol. Psychiatry,50:884-897,2001.
 - (9) Niaz,O.S., Haddad,P.M. : Thirty-five months experience of risperidone long-acting injection in a UK psychiatric service including a mirror-image analysis of in-patient care. Acta Psychiatr. Scand.,116:36-46,2007.
 - (10) 全国精神障害者ネットワーク協議会調査研究事業部: 精神疾患のあきらめとリカバリー. 精神火薬とリカバリーの現状 2012 年度版, pp.57,59,2012.)
 - (11) 肥田 裕久(ひだクリニック)、【持効性 LAI のベネフィットとリスク】本人の立場から見た持効性 LAI 治療のメリット・デメリット(解説/特集)、臨床精神薬理 (1343-3474)18 巻 6 号 Page733-740(2015.06).
 - (12) 肥田 裕久(宙委会ひだクリニック)、ピアインパクト 持続性 LAI(LAI)治療展開にピアの果たす役割、精神科看護 (0910-5794)45 巻 5 号 Page066-071(2018.04)

【SV コメント】

佐川 佳南枝(京都橘大学)

宮本さんの今回の発表は私にとっても非常に印象に残るものでした。というのも、私自身が初めて M-GTA(当時はまだ M-GTA とは言ってなかった)を用いて論文化したのが今から約 20 年前の 2001 年(もう 20 年も経つとは!)で、「分裂病患者の薬に対する主体性獲得に関する研究 : グラウンデッド・セオリーを用いた分析」というものだったからです。当時はまだ「分裂病」と言っていました。そして第二報を 2003 年に「統合失調症患者の薬に対する主体性獲得に関する研究 第 2 報 : グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて」として発表しました。私の問題意識は、薬を飲む、飲まない、どのような認識で飲むかに患者さんの主体性が表れていることに着目して分析していったのでした。その時の概念に「魔法の薬」(飲めば完全に回復するというように薬に魔術的期待をもつ)というものがありませんでしたが、LAI とはまさにこの「魔法の薬」のようにも思えます。宮本さんは SV の途中、分析テーマを「入院中の統合失調症患者が注射製剤を選択し、主体的な投与に至るプロセス」とされましたが、それには違和感がありました。薬を飲んだり止めたりという行為にはその人の薬に対する主体性が表れると思うのですが、薬剤を打たれるというのは受動的であり、また薬の知識がなくても普通に過ごせるというのも受動的であるような気がしたからです。しかし宮本さんによると、定期的に注射を打ちに来るということに、その人たちの主体的な意味付けがあるということでした。私にはこの人たちが、薬や疾患に対してネガティブな気持ちを抱えたまま、継続的に注射を打ちに来るということ、「普通」に憧れて、疾患を思い起させる薬のフィルムを見るのも忌避しているということなどが印象に残りました。私の分析した患者さんたちは、「薬からの自律性」(薬から自由になりたい)と願いながらもかなわず、服薬心理教育などで自分の病いと向き合っていかなざるを得ない人たちでした。しかし一方、LAI を継続してる人たちは薬や疾患の知識を持たず、それらと向き合わなくても地域生活を続けていけています。「薬からの自律性」を得ている人たちです。非常に便利でスティグマを感じずに生活できるのは素晴らしいと思う反面、少し怖い部分もあるとも感じます。このように、薬を飲んでいる人たちと LAI を受けている人たちを比較してみるのも分析上、有効なのではないかと感じました。

データが非常に面白かったです。貴重なデータを得ていらっしゃると思いますので、丁寧に分析を進めていただきたいと思います。意義の大きな研究になると思います。期待しています。

◇西日本 M-GTA 研究会 2021 年度の活動報告

本研究会は、大学院博士前期課程(修士課程)を修了していることを参加要件としている。現在の会員数は約 50 名である。活動内容は、年 3 回程度の定例会にて会員の研究報告をもとにグループスーパービジョンを行うこと、毎年 2 月に外部講師などの招聘による年度末研究会を実施している。会員相互で事務局等を引き継ぎ、研究会を運営し、研究論文(博士論文)を書く必要がある人を支援することを研究会の主な目的としている。また、年 4 回のニュースレターを作成し配信することで、参加できなかった会員にも活動内容を共有している。

2020 年度の活動状況

	日時	発表者	参加者	場所
第 51 回	5 月 15 日	1 名	18 名	Zoom 開催
第 52 回	9 月 4 日	1 名	20 名	
第 53 回	11 月 13 日	1 名	10 名	
第 54 回	2 月 13 日	招聘	30 名	

本研究会は COVID-19 の影響を受け 2020 年度を休会としていたが、2021 年度より定例会をリモート開催にて再開した。本年度は各定例会に研究発表者を 1 名として研究報告や研究構想発表を行った。会員にとっては、他の人の研究に触れる貴重な機会となった。また、会の後半は、ブレイクアウトルーム機能を使い 5 名程度のグループでディスカッションを行い、会員間の貴重な交流の時間となった。

2021 年 2 月 13 日の年度末研究会において、木下先生を講師としてお招きし、「M-GTA:原点確認と今後の役割」をテーマにご講義いただいた。講義の後の質疑応答の時間において、木下先生に会員からの疑問に丁寧に回答いただいた。方法論に走りがちになるなか、M-G T A の原点である特性に改めて立ち戻るとともに、実践のための研究について考えるなどそれぞれの会員にとって貴重な時間となった。

西日本 M-GTA 研究会の開催は 54 回を迎えた。今後も、会員相互で研究活動を支援していくための場として会員相互で本研究会を盛り上げていきたい。当面はオンライン開催を続けながら、コロナの収束により対面での開催が再開し、顔を合わせる中で会員間の交流が再び図れることを願っている。

◇2021年度中四国M-GTA研究会の活動報告

会長 眞砂 照美

当研究会は2018年2月に設立されました。次年度で活動は4年目を迎えます。現在は、質的研究全般の方法論的な学習、研究の促進、会員相互の親睦を深めることを目的に8名の事務局のメンバーで運営しております。しかし、2020年度はcovid-19 pandemicにより定例勉強会の活動が対面では困難となったため、自粛(休止)させていただきました。今後、どのように実施していくか、事務局で検討を重ね、2021年度の活動から初めてのオンライン開催となりました。毎回、10名～15名程度の会員や新規会員の方にご参加いただき、活発に発言していただく様子に会員の皆様がM-GTA分析手法に関心を寄せ、学ぶ機会の場を求めておられたのだと改めて感じました。また、コロナ禍にあつて、以前のように対面での勉強会とはいきませんが、オンラインを用いて会員の皆様との学びを深め、情報共有や討論などからお互いの研究の刺激や活力を得る場となりました。

今年度の定例勉強会の開催形態はZoomとし、以下の表のとおり、実施しました。研究・構想発表では、会員の方に研究を進められるにあたり、どのように研究テーマを追究し、指導教員などの関わりを通して自らの学びを深めたのか、ほかM-GTAの分析技法の具体的な実施方法などを示していただきました。参加者からは、事後アンケートより、「具体的な例が挙げられていてわかりやすい」、「研究経過や結果、経験談がよい」など、ご意見をいただきました。また、当会のSVの先生方が実施して下さる講義は、「わかりやすい」と大変好評でした。講義後のオンラインブレイクアウトルーム機能を用いた小グループの討論では、「ほどよい人数でお互いの顔を見て話し合いができてよい」などご意見をいただきました。さらに、今年度の定例勉強会において、会員の皆様との対話や寄せられたアンケートのご意見より、コロナ禍が続く中で研究を取り巻く状況も刻々と変化していることが感じられました。このような機会は会員の皆様の研究に関する状況や思いを知ることでもでき、中四国M-GTA研究会としても大変貴重な1年間となりました。次年度は、この1年間の経験を糧にしながら、会員の皆様とともにM-GTAを活用した質的研究の学びを深めていけるよう、中四国M-GTA研究会一同、様々な活動を進めてまいりたいと思っています。

2022年度に向けた活動では、開催が1年間延期となった第6回合同研究会を中四国M-GTA研究会が2022年9月10日(土)・11日(日)の日程でオンラインにて実施させていただくにあたり、その準備に取り組んでおります。プログラムでは、木下康仁先生のご講演やワークショップなどを予定しています。主催研究会として、全国の各研究会の皆様とM-GTAに関する学びや親交を深める会となるよう、尽力していきたいと思っております。近日中に第6回合同研究会のご案内が皆様のお手元に届くかと存じますが、是非、ご参加いただけますと幸いです。開催地の広島より、オンライン会場で全国のM-GTA研究会会員の皆様とお会いできますことを心より楽しみにしております。

<2021年度 中四国M-GTA研究会定例勉強会>

開催日	内容	方法
4月24日	・研究発表(会員) 学位論文(修士)をもとに学会誌に投稿された論文の研究発表	パワーポイントで作成した資料を画面共有しながら発表

6月12日	・講義 テーマ;「分析テーマ, 分析焦点者」講師 中村敦子先生 ・構想発表(会員)	構想発表後、小グループでSV がファシリテーターを行うディス カッションを実施
9月18日	・ワークショップ テーマ;「実際のデータをもとに分析焦点者と分析 テーマを決めよう!」講師 長崎和則先生	オリジナルのインタビューデー タを事前参加者に送付し精読 後、ワークショップを実施
12月18日	・講義+グループワーク テーマ;「データ収集のためのインタビューについて 学ぼう~インタビューガイド作成と実際のインタビュー ~」講師 黒田寿美恵先生	講義の中にグループワークを 交えたスタイルで実施

◇次回のお知らせ

○第 95 回定例研究会

日時:2022 年 5 月 7 日(土)13:30~17:00

○2022 年度 M-GTA 研究会 総会

日時:2022 年 5 月 7 日(土)13:00~13:30(定例研究会前)

会員のみなさまは、総会へのご参加をお願いいたします。

会場:オンライン

◇編集後記

NL108 号は、1 月に行われた会員限定シンポジウムと2月の定例研究会の合併号として発行しました。

会員限定シンポジウムで発表された畑中先生は、博士課程の研究において、まず、1 人の教員を追いかけた事例研究からはじめ、そこで見出されたミドル・アップダウンマネジメントにおける「巻き込み」という現象を別の事例研究でも確認をした上で、その「巻き込み」がなされるプロセスを M-GTA で明らかにするという、3つの質的研究を丁寧に積み重ねながら論文を執筆されていました。畑中先生の博士論文の研究の進め方が大変興味深く、これから質的研究を用いて博士論文を執筆される方々の一つ指標になるのではないかと思います。(今井朋子)